

大阪府立高津高等学校	基礎枠
指定第Ⅳ期目	05～09

①令和7年度スーパーサイエンスハイスクール研究開発実施報告（要約）

① 研究開発課題		グローバルな舞台で次世代を牽引する科学技術リーダーの育成プログラムの開発																																																														
② 研究開発の概要		<p>①学校設定教科「創造探究」の深化と全校体制の強化</p> <p>②先進的事業で傑出した科学技術リーダーの育成とそのプログラムの確立</p> <p>③英語運用能力向上の取組を通じて国際的な視野とコミュニケーション能力の育成およびグローバルに活躍する科学技術リーダーとしての素地の育成</p> <p>④第一線で活躍する卒業生の活用と、持続的な人材育成サイクルの確立</p> <p>⑤地域全体の科学的リテラシー向上と域内外への波及</p> <p>⑥大学や企業・研究機関とのより効果的な連携事業開発とその深化</p>																																																														
③ 令和7年度実施規模		<table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">学科</th> <th colspan="2">第1学年</th> <th colspan="2">第2学年</th> <th colspan="2">第3学年</th> <th colspan="2">計</th> </tr> <tr> <th>生徒数</th> <th>学級数</th> <th>生徒数</th> <th>学級数</th> <th>生徒数</th> <th>学級数</th> <th>生徒数</th> <th>学級数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>文理学科</td> <td>359</td> <td>9</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>359</td> <td>9</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">文理学科</td> <td>理科</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>201</td> <td>5</td> <td>178</td> <td>5</td> <td>379</td> <td>10</td> </tr> <tr> <td>文科</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>156</td> <td>4</td> <td>168</td> <td>4</td> <td>324</td> <td>8</td> </tr> <tr> <td colspan="2">学年ごとの計</td> <td>359</td> <td>9</td> <td>357</td> <td>9</td> <td>346</td> <td>9</td> <td>1062</td> <td>27</td> </tr> </tbody> </table> <p>（備考）全校生徒を対象に実施。特に高度な内容については、文理学科理科を対象とする。</p>								学科	第1学年		第2学年		第3学年		計		生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	文理学科	359	9	—	—	—	—	359	9	文理学科	理科	—	—	201	5	178	5	379	10	文科	—	—	156	4	168	4	324	8	学年ごとの計		359	9	357	9	346	9	1062	27
学科	第1学年		第2学年		第3学年		計																																																									
	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数																																																								
文理学科	359	9	—	—	—	—	359	9																																																								
文理学科	理科	—	—	201	5	178	5	379	10																																																							
	文科	—	—	156	4	168	4	324	8																																																							
学年ごとの計		359	9	357	9	346	9	1062	27																																																							
④ 研究開発の内容		<p>○研究開発計画</p> <table border="1"> <tr> <td>第1年次</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> 学校設定教科「創造探究」のプログラムや独自教材の開発と指導体制の強化について、1年次では「高津LCⅠ（1単位）」を、2年次では「高津LCⅡ（2単位）」を、3年次では「高津LCⅢ（1単位）」を実施した。また、1・2年次でそれぞれ「高津LC情報（1単位）」を実施した。 科学技術リーダーの育成に関する取組開発について、大学・企業・公共施設などの機関や海外と連携して、サイエンスツアーや環境フォーラムを実施した。また、科学系部活動の指導でも協力を得た。 英語運用能力向上とグローバルな人材育成に関する取組開発について、海外の高校と連携して台湾サイエンスツアーや海外オンライン交流会を実施したほか、英語運用能力の向上などのために、K I T E C (Kozu Intensive Training of English Communication)やG U L S (Global Understanding with Local Skills)を実施した。 卒業生の活用と、人材育成サイクルの確立に関する取組開発について、同窓会と協力して卒業生の人材バンクを構築し、高津クリエイトラボセミナーや講演会を実施した。 </td> </tr> </table>								第1年次	<ul style="list-style-type: none"> 学校設定教科「創造探究」のプログラムや独自教材の開発と指導体制の強化について、1年次では「高津LCⅠ（1単位）」を、2年次では「高津LCⅡ（2単位）」を、3年次では「高津LCⅢ（1単位）」を実施した。また、1・2年次でそれぞれ「高津LC情報（1単位）」を実施した。 科学技術リーダーの育成に関する取組開発について、大学・企業・公共施設などの機関や海外と連携して、サイエンスツアーや環境フォーラムを実施した。また、科学系部活動の指導でも協力を得た。 英語運用能力向上とグローバルな人材育成に関する取組開発について、海外の高校と連携して台湾サイエンスツアーや海外オンライン交流会を実施したほか、英語運用能力の向上などのために、K I T E C (Kozu Intensive Training of English Communication)やG U L S (Global Understanding with Local Skills)を実施した。 卒業生の活用と、人材育成サイクルの確立に関する取組開発について、同窓会と協力して卒業生の人材バンクを構築し、高津クリエイトラボセミナーや講演会を実施した。 																																																					
第1年次	<ul style="list-style-type: none"> 学校設定教科「創造探究」のプログラムや独自教材の開発と指導体制の強化について、1年次では「高津LCⅠ（1単位）」を、2年次では「高津LCⅡ（2単位）」を、3年次では「高津LCⅢ（1単位）」を実施した。また、1・2年次でそれぞれ「高津LC情報（1単位）」を実施した。 科学技術リーダーの育成に関する取組開発について、大学・企業・公共施設などの機関や海外と連携して、サイエンスツアーや環境フォーラムを実施した。また、科学系部活動の指導でも協力を得た。 英語運用能力向上とグローバルな人材育成に関する取組開発について、海外の高校と連携して台湾サイエンスツアーや海外オンライン交流会を実施したほか、英語運用能力の向上などのために、K I T E C (Kozu Intensive Training of English Communication)やG U L S (Global Understanding with Local Skills)を実施した。 卒業生の活用と、人材育成サイクルの確立に関する取組開発について、同窓会と協力して卒業生の人材バンクを構築し、高津クリエイトラボセミナーや講演会を実施した。 																																																															

	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の科学的リテラシー向上と域内外への波及の取組開発について、Kozu Science Labo 研究交流会により地域の小・中学生の科学的リテラシーを向上させるとともに、教員対象事業や学校ホームページを通じて本校の成果を域内外へ波及させた。 ・大学や企業・研究機関との効果的な連携事業の開発について、体験型進路学習や、創造探究事業を実施した。
第2年次	<ul style="list-style-type: none"> ・学校設定教科「創造探究」のプログラムや独自教材の開発と指導体制の強化の改善について、「高津LCⅠ」における自己評価票による学習項目調査の実施や、「高津LCⅡ」における授業の一本化と複数教員による同時指導を実施した。 ・科学技術リーダーの育成に関する取組開発の改善について、連携している大学や企業、公共施設を一部変更したほか、本校が中心となり大阪府下の高校と宇宙プログラムを実施した。 ・英語運用能力向上とグローバルな人材育成に関する取組開発の改善について、新たにグローバルリーダー育成研修を実施した。 ・卒業生の活用と、人材育成サイクルの確立に関する取組開発の改善について、高津クリエイトラボセミナーや講演会の講師について、従来よりも若いOB・OGからも協力を得られるようにした。 ・地域の科学的リテラシー向上と域内外への波及の取組開発の改善について、Kozu Science Labo 研究交流会「科学実験講座」の内容を見直した。 ・大学や企業・研究機関との効果的な連携事業の開発の改善について、連携している大学や企業、研究機関を一部変更した。
第3年次	<ul style="list-style-type: none"> ・学校設定教科「創造探究」のプログラムや独自教材の開発と指導体制の強化について改善を検証する。 ・科学技術リーダーの育成に関する取組開発について改善を検証する。 ・英語運用能力向上とグローバルな人材育成に関する取組開発について改善を検証する。 ・卒業生の活用と、人材育成サイクルの確立に関する取組開発について改善を検証する。 ・地域の科学的リテラシー向上と域内外への波及の取組開発について改善を検証する。 ・大学や企業・研究機関との効果的な連携事業の開発について改善を検証する。
第4年次	<ul style="list-style-type: none"> ・学校設定教科「創造探究」のプログラムや独自教材の開発と指導体制の強化について拡充を図る。 ・科学技術リーダーの育成に関する取組開発について拡充を図る。 ・英語運用能力向上とグローバルな人材育成に関する取組開発について拡充を図る。 ・卒業生の活用と、人材育成サイクルの確立に関する取組開発について拡充を図る。 ・地域の科学的リテラシー向上と域内外への波及の取組開発について拡充を図る。 ・大学や企業・研究機関との効果的な連携事業の開発について拡充を図る。
第5年次	<ul style="list-style-type: none"> ・学校設定教科「創造探究」のプログラムや独自教材の開発と指導体制の強化について成果を検証する。 ・科学技術リーダーの育成に関する取組開発について成果を検証する。 ・英語運用能力向上とグローバルな人材育成に関する取組開発について成果を検証する。 ・卒業生の活用と、人材育成サイクルの確立に関する取組開発について成果を検証する。

- ・地域の科学的リテラシー向上と域内外への波及の取組開発について成果を検証する。
- ・大学や企業・研究機関との効果的な連携事業の開発について成果を検証する。

○教育課程上の特例

学科	開設する科目名	単位数	代替科目名	単位数	対象
文理学科	高津LCⅠ	1	総合的な探究の時間	1	第1学年全員
	高津LC情報	1	情報Ⅰ	1	
	高津LCⅡ	2	総合的な探究の時間	2	第2学年全員
			理数探究	2	
高津LC情報	1	情報Ⅰ	1		

「高津LCⅠ」および「高津LCⅡ」のそれぞれの探究活動と連携できるよう、「高津LC情報」として、主に1年次ではプログラミングを、2年次ではデータサイエンスを学習する。

○令和7年度の教育課程の内容のうち特徴的な事項

学科	第1学年		第2学年		第3学年		対象
	科目名	単位数	科目名	単位数	科目名	単位数	
文理学科	高津LCⅠ	1	高津LCⅡ	2	高津LCⅢ	1	全員
	高津LC情報	1	高津LC情報	1			

①第1学年では、学校設定教科「創造探究」、学校設定科目「高津LCⅠ」（1単位）を開設し、科学的素養を向上させる課題研究基礎の開発に取り組んだ。また、学校設定教科「創造探究」、学校設定科目「高津LC情報」（1単位）を開設し、大阪工業大学と連携した授業を展開し、主にプログラミングの基礎について実習と講義を通じた授業開発に取り組んだ。

②第2学年では、学校設定教科「創造探究」、学校設定科目「高津LCⅡ」（2単位）を開設し、全生徒が21講座（文理融合分野、文系分野含む）に分かれ、課題研究に取り組んだ。また、学校設定教科「創造探究」、学校設定科目「高津LC情報」（1単位）を開設し、大阪工業大学と連携した授業を展開し、主にデータサイエンスについて実習と講義を通じた授業開発に取り組んだ。

○具体的な研究事項・活動内容

1. 学校設定教科「創造探究」の深化と全校体制の強化に関する取組

1年次で「高津LCⅠ（1単位）」、2年次で「高津LCⅡ（2単位）」、3年次で「高津LCⅢ（1単位）」を実施し、1・2年次ではそれぞれ「高津LC情報（1単位）」も実施する。前年度の課題に対する改善の検証を行うとともに、成果を広く普及する。

2. 先進的事業で傑出した科学技術リーダーの育成とそのプログラムの確立への取組

次世代の科学技術リーダーの育成のために、大学などの外部機関や海外と連携して、サイエンスツアーなどや科学系部活動への指導を実施し、前年度の課題に対する改善の検証を行う。

3. 英語運用能力向上の取組および国際的な視野とコミュニケーション能力を育成する取組

海外の高校と連携して海外オンライン交流会などを実施するほか、英語運用能力の向上などのためにKITECやGULSを実施し、前年度の課題に対する改善の検証を行う。

4. 第一線で活躍する卒業生を活用し、持続的な人材育成サイクルを確立する取組

同窓会と協力して卒業生人材バンクを構築し、講演会などを実施するほか、TAとして事業への協力体制を整え、前年度の課題に対する改善の検証を行う。

5. 地域全体の科学的リテラシー向上と域内外への波及の取組

Kozu Science Labo 研究交流会を実施して、地域の小・中学生の科学的リテラシーを向上させるとともに、教員対象事業や学校ホームページを通じて本校の成果を域内外へ波及させる。前年度の課題に対する改善の検証を行い、本校が地域のSSH拠点校となって中核的な役割を果たすことをめざす。

6. 大学や企業・研究機関とのより効果的な連携事業開発とその深化の取組

多くの事業所や大学研究室と連携した体験型進路学習や、大学や企業、研究機関などが実施している事業に生徒自身の興味・関心に基づいて参加する創造探究事業について、前年度の課題に対する改善の検証を行う。

⑤ 研究開発の成果

1. 学校設定教科「創造探究」の深化と全校体制の強化に関する取組

「高津LCⅠ」の前期では、課題研究に関してその意義から研究倫理、議論技術、プレゼンテーション技術、レポート作成技術について、知識の習得と実践を行ってスキルの定着を図った。SDGs基礎学習では、自身がもともと興味を持てるテーマだけでなく、さまざまなテーマについての新聞記事に触れることで視野を広げられるようにした。後期では、調査技術や情報処理ソフトの操作や特徴を学び、基本的なスキルを習得した。その後、前期に取り組んだSDGsに関する基礎学習を踏まえて、SDGsの目標達成に向けて、探究活動および論文作成に取り組んだ。生徒は当初苦戦していたが、意欲的に取り組み、新たな発見と深い思考を経験することができた。今年度は年度当初に、中学校までの学習状況と生徒自身が自己の技能についてどのように評価しているかを把握するための調査を行った。この調査では「統計学の基礎」「研究倫理」「論文の作成方法」「研究を進める手法」「要旨の作成方法」については学習した割合が10%未満であった。また、自己の技能については、「研究等において取り組んだ内容を英語で要約することができる」「Excelや統計ソフト等を用いて、データを適切に処理することができる」については30%未満となっており、このあたりの指導が必要と考えられる。授業効果については、多くの項目で肯定的な評価が75%以上となっており、授業の効果が確認できた。授業開始時の自己評価が30%未満と低かった「英文要約の書き方について」「統計学の基礎について」についても70%弱の生徒が「向上した」と回答した。

「高津LCⅡ」では、前年度2月に実施した高津LC交流会について、担当教員から「効果があった」という意見が多く、1年生も熱心にメモを取りながら質問するなど今後活用しようとしていた。課題研究を進めるにあたっては、当初、研究テーマの設定や研究の進め方などに苦慮していたが、教員の助言等を受けて、研究活動を主体的に進めることができるようになった科学的に物事を捉えて考える力の向上や、学習していない領域を新たに自主的に学習するなどの学習意欲の向上がみられたほか、班の中で役割を分担し、協力して効率的な研究活動を行うなど、研究班全員が主体的に活動する様子もみられた。また、今年度から地学分野の課題研究班も新たに設置し、地球科学分野に強い意欲を持っている生徒の希望に添える体制をとることができた。授業効果について、「大変増した」の割合を見ると、(8)周囲と協力して取り組む姿勢、(9)粘り強く取り組む姿勢、がいずれも35%を超えており、特に効果が高かったと考えられる。

「高津LCⅢ」では、継続して課題研究を行ったことで、粘り強く取り組む姿勢が身につく、論理的思考力や分析力、問題解決能力の更なる向上が見られた。また、研究の集大成として論文を作成したことで、表現力や論理構成力を伸ばすことができた。

「高津LC情報」では、大阪工業大学と連携して作成した教材について、常に改善を行っており、学校ホームページで公開して普及に努めている。

2. 先進的事業で傑出した科学技術リーダーの育成とそのプログラムの確立への取組

台湾サイエンスツアーについて、ツアー全体として参加者の満足度は100%、事前研修の成果の活用や、環境に関する関心の高まりについても、肯定的に回答が100%であった。自身の将来についても全員が「得るものがあった」と肯定的に回答しており、環境に対する意識の変化や、将来を見越しての英語学習への意欲の高まりについての回答も多かった。英語でのコミュニケーションについては、肯定的な回答は67%であったが、昨年度の55%よりは上昇した。英語が活用できたかどうかの程度は参加者自身の英語力もさることながら、伝えようとする意欲や積極性による影響も大きいと実感した。

種子島・屋久島サイエンスツアーでは、アンケートの結果、満足度は92%であったが、これは、荒天のため3日目に種子島へ移動することができず、研修の内容を大きく変更せざるを得なかったためと考えられる。しかし、結果的には総じて満足度の高いツアーだったことが伺えた。また92%の生徒が「自分の進路を考える上で得るものがあった」と回答しており、進路や将来を考える良い契機になったこともいえる。

アジア高校生環境フォーラムでは、満足度について海外参加者が100%、本校参加者が93%と大変高くなった。講義・実習については、難易度が高いと感じる海外参加者もいたが、実習等全般に対して全員が「興味を抱いた」と回答した。日本の生徒では、86%の生徒が「将来を考えるうえで得るものがあった」と答えており、記述回答でも科学に関する興味関心や英語学習の意欲向上、英語でのコミュニケーション力の向上を書いた者が多かった。

科学系部活動としては、今年度は科学部に25名、生物研究部に9名が在籍している。科学系部活動での成果発表については、口頭発表やオンライン発表、ポスター発表など様々な発表形式を経験し、それぞれに適した発表技術を向上させた。これらの成果として、様々な機会でご表彰を受けた。また、科学系部活動の部員が大きく関わる小・中学生対象の科学実験講座や研究発表会では、生徒自身がいかに分かりやすく説明するかを考え、実際に指導するなどの経験を積むことで、コミュニケーション能力や指導力、説明力などを向上させた。

3. 英語運用能力向上の取組および国際的な視野とコミュニケーション能力を育成する取組

海外オンライン交流会では、今年度は、スライド資料によるプレゼンテーションはおこなわず、会話のみの形式で実施した。この形式は生徒にとっても新たな挑戦だったが、参加生徒は交流校の生徒との会話を通じて英語運用能力を向上させた。全体として、海外生徒との英語コミュニケーションのでき具合について、「うまく、または、まあまあコミュニケーションができた」と回答した割合は85.7%に達し、これは昨年度の約70%から大きく上昇した。また、交流会を通じて英語力が向上したかについては、78.6%の生徒が「とても、または、まあまあ感じる」と回答した。今年度はさらに、英語運用能力の向上を図るためにIMU (International Meetups) を立ち上げた。海外オンライン交流会とIMUを併用することで、参加者は、ほぼ月1回の頻度で交流校の生徒とコミュニケーションをとることができ、より多くの時間を確保することができた。

KITECでは、基礎講座の満足度については95%が満足と回答した。応用講座についても満足度は高く、英語運用能力の向上に効果があったと考えている。

グローバルリーダー育成研修は、事後アンケートで満足度は100%であり、内容についても、SDGs研修、リーダーシップ研修、卒業生講演会、企業訪問のいずれも肯定率は100%であった。また、研修を通じて約7割の生徒が英語力の向上を実感する結果となった。さらに、参加者全員が、自分の中に変化が生まれ、将来について考えるきっかけになったと回答した。

4. 第一線で活躍する卒業生を活用し、持続的な人材育成サイクルを確立する取組

アップできるように連携を強化していきたい。

6. 大学や企業・研究機関とのより効果的な連携事業開発とその深化の取組

体験型進路学習について、1年生の体験型進路学習Ⅰでは、生徒アンケートにおいて「意外な発見があったか」や「働くことの難しさ・厳しさ・喜びを感じる事ができたか」という質問には、93%程度の生徒が肯定的に回答し、発表のでき具合についても、95%程度の生徒が肯定的に回答した。また、「働くことについて考えるいい機会になったと思うか」という質問に対しては「大変思う」が71%程度、「まあ思う」が28%程度であった。2年生の体験型進路学習Ⅱでは、生徒アンケートにおいて「進路を考えて決定していくうえで有意義な企画だと思うか」という質問に対して、88%程度の生徒が肯定的な回答をした。記述回答では「大学レベルの課題や実際に大学生や先生との普段はできない交流ができ、とても貴重な体験ができた」「答えのない問いに自分なりの正解を導き出すということに魅かれた」「実際に自分で経験してみることで、その学部には自分には本当に行きたいのか、やりたいのかなどをよく考えることができた」などの評価を得た。この事業では、訪問先の研究室を生徒の希望分野によって決定している。そのため80%程度の生徒が「自分の志望と合っていた」と評価したが、一方で「自分が思っていたことと違う分野であることが今回発見でき、進路に役立てるチャンスだと思う」などの評価も存在した。以上のことより、将来に対するモチベーションを高めるなど進路意識の向上のみならず、学習意欲や知的好奇心を向上させることが示された。また、プレゼンテーションによる成果発表を通じて、論理的に考える力やプレゼンテーション能力、コミュニケーション能力の向上に寄与した。

創造探究事業については、1・2年生を中心にのべ2000名程度の生徒が参加した。これは第Ⅳ期に入ってから3年とも同等の数値であり、継続して生徒が主体的にこれらの事業へ参加できていた。事業後に提出されたポートフォリオの評価では、「参加してよかった」と回答している生徒が96%程度、「自分の進路を考える上で参考になった」と回答した生徒が90%程度であった。記述回答では「実際に行って、見るというのは知識だけを得るのとはまったく違うものであると感じた。目で見て感じるものは記憶に残りやすいし、それから得られる知識はとても深くなった」「難しい話が多く、分からなかったところも多かったため、すべてを完璧に理解することはできなかったが、次に似たような事業がある際は、それも参加したいと思う」などという、興味・関心や進路意識の向上を示す回答も多くあったことから、生徒にとって有意義な事業であったことが伺えた。

7. 実施の効果について

取組の効果については、「科学技術、理科・数学の面白そうな取組に参加できた」「科学技術、理科・数学に関する能力やセンス向上に役立った」「理系学部の進学に役立った」において、取組の効果があつたと肯定的な回答をした生徒の割合が3年生で最も高くなっており、学年進行とともに自らの進路を決定していくなかで、様々な事業に参加したり、理科や数学の授業数の多いカリキュラムを経験したりすることが影響しているのではないかと考えている。「将来の志望職種探しに役立った」「国際性の向上に役立った」「社会の問題をより身近に感じるようになった」においては、肯定的な回答をした生徒の割合が1年生で最も高くなっており、これは1年生が体験型進路学習によって職場訪問を行ったこと、高津LCIの授業においてSDGsをテーマに海外を含めて様々な社会問題を扱っていること、1年生はKITECが全員参加であり、国際交流事業の参加者も1年生が多いことなどが影響していると考えている。

興味・関心・意欲の向上について、1年生から2年生にかけて大きく伸びたが、これは2年生から課題研究が始まることと、2年間にわたって様々なSSH事業に取り組んできた結果であると考えている。生徒の興味についても、1年生から2年生にかけて肯定的な割合が大幅に増え、3年生にかけて評価が高くなっている。これは、カリキュラム上2年生から理科に関する授業時間数が大幅に増

えることや、「高津LCⅡ」「高津LCⅢ」で実際に課題研究に取り組むことが大きく関係しているのではないかと考えている。そのなかで、「理科実験への興味」「観測や観察への興味」は1年生の肯定的な割合がやや低いが、これについては1年生では全員がSSH事業の主対象となっており、その中には文系への進路を希望する生徒が半数近く含まれていることも影響していると考えている。また、同一期での経年変化でも、1年次から2年次にかけて肯定的な回答の割合が大きく増加していることから、理科や課題研究の授業の増加と関連があると考えている。また、3年間にわたって肯定的な回答の割合が上昇していることから、体系的なプログラムが生徒の興味を高めるのに効果があったと考えている。

姿勢の向上については、ほとんどの項目において、肯定的な回答の割合が学年進行とともに上昇している。これは「高津LCⅡ」、「高津LCⅢ」の授業で課題研究の取組を経験したことが大きく影響しているのではないかと考えている。特に、肯定的な回答の割合が9割近い、「自分から取り組む姿勢」「周囲と協力して取り組む姿勢」「粘り強く取り組む姿勢」は関連性が高いと考えており、グループで課題研究に取り組むことにより、先行研究調査や実験などの実施、発表資料の作成や発表の実施などを通じて養われた姿勢であると考えている。また、同一期で比較しても、1年次と比べて2年次で肯定的な評価の生徒の割合が増加しており、特に「粘り強く取り組む姿勢」において、「大変増した」の伸びが大きくなっていることからその傾向が伺えた。1年生でも、上記の質問項目における肯定的な回答の割合は8割を超えており比較的高い。これについては「高津LCⅠ」で後期に行う、本校作成の「探究ノート」を使った取組が、学ぶ意欲の向上、主体性、積極性の向上につながっていると考えている。

能力の向上については、「発見する力」「問題を解決する力」「真実を探って明らかにしたい気持ち」「考える力」において、肯定的な評価が非常に高いのは、「高津LCⅡ」「高津LCⅢ」の課題研究だけでなく、その入門となる「高津LCⅠ」でも様々な課題に取り組んでいることや、その他のSSH事業にも取り組んできた結果であると考えている。特に、「真実を探って明らかにしたい気持ち」「考える力」の項目について2・3年生で「大変増した」の割合が高くなっているのは、「高津LCⅡ」「高津LCⅢ」の授業で課題研究への取組を経験したことが大きく影響しているのではないかと考えている。同一期で比較してもその傾向が顕著に表れており、これらはまさに課題研究の取組を通じて伸ばしたいとしているものである。一方、「成果を発表し伝える力」においては、1年生が他の学年と比べて肯定的な割合がやや低くなっている。これについては、ポスター発表や口頭発表などの多くの発表機会が2年生に設定されているからではないかと考えている。また「国際性」においては他の項目と比較して肯定的な割合がやや低くなっている。これについては、KITECや国際交流事業などの国際性向上の取組が、生徒の中でSSH事業と結びつけられておらず低くなったと考えている。

生徒の自己評価について、SSH事業主対象である2・3年生の理系生徒および1年生のうち理系志望者について、「興味・関心」「姿勢」「能力」に分けて項目ごとに見ると、「興味・関心」では1年生理系志望者 3.85、2年生理系 3.82、3年生理系 4.15 となり、3年生理系の自己評価が高く、1年生理系志望者と2年生理系は同程度であった。「姿勢」では1年生理系志望者 3.86、2年生理系 3.90、3年生理系 4.08 となり、こちらも3年生理系が最も高く、次いで2年生理系となった。「能力」では1年生理系志望者 3.75、2年生 3.70、3年生 3.98 となり、やはり3年生理系が最も高く、次いで1年生理系志望者となった。また同一期で比較すると、2年生理系はほぼすべての項目で増加または横ばいとなっていた。3年生理系はすべての項目で増加または横ばいとなり、3年次の数値が最も高かった。これらは2・3年生の高津LCⅡ・Ⅲの授業で課題研究に全員が取り組んでいることや、3年生にわたり数多くのSSH事業を経験してきた結果であると考えている。

各項目の評価平均値を比較すると、理系全体(1年生志望者を含む)は、「未知の事柄への好奇心」4.11、「真実を知って明らかにしたい気持ち」4.06、「自分から取り組む姿勢」4.01、「学んだことを

応用することへの興味」3.99、「考える力」および「周囲と協力して取り組む姿勢」3.98、が上位5つとなりこれらの自己評価が高いことがわかる。また、年次進行による平均値の変化を見ると3年生理系では、「成果を発表し、伝える力」の伸びが3年間で0.4と最も大きく、次いで「国際性」の0.3となった。2年生理系では、「成果を発表し、伝える力」「自分から取り組む姿勢」「周囲と協力して取り組む姿勢」の伸びが0.3となっている。これらは課題研究をはじめ本校の多くの取組で伸ばしたいと考えているものであり、その成果が表れている。

理系と文系において2・3年生で比較すると、ほぼすべての項目において、各学年の文系生徒の平均点より理系生徒の平均点の方が高くなっている。このことから、理系生徒を中心に高い能力を持った人材が育成できていることがわかり、本校が科学技術系人材を育むために開発・実践してきた取組の成果が明確に現れている。一方で「国際性」については、2・3年生とも理系より文系での評価が高くなっている。これについては、理系生徒においては英語を苦手とする生徒が一定数いることが影響しているのではないかと考えている。とはいえ、理系生徒の評価も3年かけて増加している。「国際性」は、英語運用能力だけではなく、「国際的な視野をもつこと」につながるため、本校が実施している国際交流事業や英語運用能力向上の取組などを通じて、少しずつではあるが着実に力をつけていると考えている。

教員に対するアンケート集計では、SSH事業に関する取組が、本校の教育活動にとって有意義であり、特に将来を担う人材育成の面や、生徒の進路意識や国際性の向上の面においてから効果が大きいことを多くの教員が実感している結果となった。また、課題研究の取組に対しても、生徒にとって有意義であるだけでなく、教員にとっても資質向上に役立つと考えている割合が高くなっていることが明らかとなった。全体として、これまでの取組が本校の教育活動として定着し、SSH事業が本校のスクールアイデンティティとなっていることを示す結果となった。

⑥ 研究開発の課題

1. 学校設定教科「創造探究」の深化と全校体制の強化に関する取組

「高津LCⅠ」では本校独自の探究ノートを使用しているが、評価の際に教員にかかる負担が大きいと、授業の質を担保しつつ評価の工夫が必要である。また、生徒アンケートでは、英語でのabstract作成や統計学を用いたデータ分析や活用に関する項目について、肯定的な評価が他項目より低いと、英語や数学、「高津LC情報」などの授業との連携なども踏まえて改善を図りたい。

「高津LCⅡ」では、現状では教員1名につき原則生徒20名を上限に指導を行っているが、十分な指導には20名は多すぎるとの指摘もある。教員定数の関係もあって早急な改善は難しいかもしれないが、この点について検討が必要と考えている。また、上級生からの課題研究のアドバイスについて、研究内容を後輩が引き継いでいる場合の関わり方について検討をしていきたい。ルーブリックについては常に見直しが必要である。また、ルーブリックによる評価について、生徒同士や生徒と教員間で議論を行う時間を、今年度一部の講座で試験的に実施した。これについて全体への導入に向けて検討したい。

「高津LC情報」においては、今後データサイエンスの分野の授業について、独自教材の完成と公開に取り組んでいく予定である。

2. 先進的事業で傑出した科学技術リーダーの育成とそのプログラムの確立への取組

科学系部活動は研究が発展してきていると同時に、実技系のコンテストの挑戦も増加している。一方で、研究計画の指導や研究の時間的調整が難しくなっている。また、研究領域が拡大したことで、顧問だけでは生徒の興味に対応した十分な指導ができない部分も引き続き生じている。大学や企業など外部の専門家の指導や、同窓会を通じての外部指導者紹介制度もあるが、専門性のマッチングに課題が残っている。卒業生の活用も含めて、専門的な指導者の確保と指導体制の確立に向けた工夫が

必要である。また、今年度は兵庫県立龍野高等学校と河川環境調査を合同で実施した。大阪北部の芥川と兵庫西部の揖保川で実習を行ったが、この取組を継続して、共同研究へと進めていきたい。

3. 英語運用能力向上の取組および国際的な視野とコミュニケーション能力を育成する取組

海外オンライン交流会では、昨年度まではスライド資料を使用したプレゼンテーション形式での交流がメインであったが、プレゼン形式は質疑応答など突発的な事象に対する対応ができないなどの課題があった。今年度は、会話形式で交流を行うように変更し、さらに、英語運用能力を向上させるため、IMUというオンライン交流会を立ち上げた。これらを併用した英語運用能力の向上に向けた取組を改善していきたい。

英語運用能力を把握するにあたっては今年度の1年生より、TOEFL Junior の利用を開始した。次年度に初めて経年変化を見ることができるので、改めて報告したい。

4. 第一線で活躍する卒業生を活用し、持続的な人材育成サイクルを確立する取組

高津クリエイトラボセミナーなどは、同窓会に協力してもらうことで運営しているが、講師の選定などにあたっては、より綿密な連携が必要である。

TAについては、毎年新たな卒業生を卒業生人材バンクに登録している。しかし、課題研究などのTAとして協力してもらうにあたって、特に大学生、大学院生の専門性をいかに把握するかが引き続きの課題である。なお卒業生の状況把握については、次年度に本校がSSHの指定を受けて以降の全卒業生に向けた一斉アンケート調査を実施する予定である。また、昨年度より卒業生人材バンクに登録している人に向けて卒業生通信の執筆依頼を開始し、より詳しい状況の把握に努めている。これについては引き続き対象者を広げて実施していきたい。

卒業生講演会については、講演会を通じてできた大学や企業などとのつながりを、課題研究や創造探究事業などに活かしていきたい。

5. 地域全体の科学的リテラシー向上と域内外への波及の取組

Kozu Science Labo 研究交流会「科学実験講座」は、参加校数が拡大している。様々な分野に興味・関心を持ってもらうためにも、参加者からのアンケート結果も参考に実施内容について工夫をしていきたい。「研究発表会」は、今年度は夏休みの研究と関連付けるため、7月下旬に開催したが、この開催時期については中学校での研究状況も踏まえて検討したい。「他校交流」では今年度、本校が開発した教材や教授資料を実際に利用している学校からの直接訪問があった。実際に使用した感想などを踏まえて、教材の改善を行っていきたい。

6. 大学や企業・研究機関とのより効果的な連携事業開発とその深化の取組

体験型進路学習では60程度の事業所と50程度の大学研究室の協力が毎年必要である。安定的な協力体制を築くと共に、常に新たな協力先の開拓を引き続き進めたい。探究活動においては、今後さらに多くの連携が行えるように、いかにして連携先を探していくか検討が必要である。また、理系分野で培ってきたノウハウを活用し、文系分野の研究にも連携を広げることができないか模索していく。

創造探究事業は、積極的に参加する生徒がいる一方で、学校での活動等との両立ができずに計画的な参加ができていない生徒もいる。中長期的な事業予定を示すとともに、日頃からの案内を充実させることで、引き続き計画的に参加を促していく。

○令和7年度 大阪府立高津高等学校SSH運営指導委員会の記録

委員（敬称略）

倉光 成紀 大阪大学 名誉教授
森田 英嗣 大阪教育大学大学院 連合教職実践研究科 教授
木田 敏之 大阪大学大学院 工学研究科 教授
谷 敬太 大阪教育大学 教育学部 教授
有馬 正和 大阪公立大学大学院 工学研究科 教授

学校側

寺本 圭一（校長）	島 和広（教頭）	大谷 則明（事務長）
前川 紘紀（首席）	中原 章太（首席）	井瀨 友輔（首席）
小野 格（教諭）	西本 萌佳（教諭）	澤田 賢輝（教諭）
青山 真己（教諭）	植田 諭史（教諭）	藤村 直哉（講師）
吉川 智規（教諭）	永木 桜（教諭）	シモンズ ニコラス（教諭）
吉光 淳（教諭）		

教育庁

塚本 翼 大阪府教育庁 教育振興室 高等学校課 指導主事
田頭 修 大阪府教育センター カリキュラム開発部 高等学校教育推進室 指導主事

第1回運営指導委員会（令和7年9月22日（月）、本校記念館）記録

- 1、校長挨拶
- 2、管理機関より
- 3、委員紹介・委員長選出
本年度委員長として倉光成紀氏を選出。
- 4、令和7年度前期SSH活動報告成
高津LCの概要、LCⅡ各分野、科学系部活動、サイエンスツアー等について各担当者より報告。
- 5、質疑応答・指導助言

質問：生徒が評価基準を知っているか、自己評価する機会があるか。自分の成果に基づいて評価を知り、修正する期間を設けているか。

回答：Ⅳ期採択時に、“生徒同士の話し合いが必要”とあったので、例えば生物班では班ごとにルーブリックで自己評価させ、その後教員と面談のような形で話し合う機会を設けている。生徒と教員とで評価が分かれることもあるが、教員から見ればよくやっているなど思うことも生徒からしたら低く評価していることもある。

意見：途中で評価をしてみて、足りない部分を認識する機会があればいいと思う。

回答：10月に自己評価を予定しているので、その後1月までの期間、どう変化するか見る予定。

意見：課題研究で指導する先生自身の知識が足りないという話があったが、例えば、そういうのは大学に行ったらできるよと夢を持たせて、将来行ってみたい、勉強してみたいと思うことをさせたらいいと思う。無理に大学のようなことを教えなくてもいいと思う。

意見：中学生を対象にした交流がいいなと思った。さらに阪大のSEEDsプログラムのようなことを少し取り入れるのもよいのでは。例えば、発表会は1回だけど、1か月に1回来校してもらい、少し実験をするような形で。先生の負担が増えてしまいますが…。

意見：4期18年、大きな枠組みができており様々な取組が形になっている印象。外部で生徒さんが発表したり賞をもらったりすることで、そういう機会がない生徒にも刺激になっていると思う。

意見：LCI、IIとも持続可能な形がとても重要で、課題研究の指導には教科を超えたノウハウの蓄積と共有が必要。そのノウハウがHPで公表され、他の学校ともそのやり方を共有し、課題研究の中心的な役割を担うことはとても重要だと思う。

意見：課題のテーマ決めについて、生徒に自由に考えさせるのも1つだが、成果が問われるのなら、教員側から方向づけるのも一つの手段かと思う。

質問：ルーブリックの改訂について、どんな手順でされているかを教えていただきたい。

回答：毎年、これを使って評価した教員から、文系理系問わず、ここに挙げられている文言がゆえに縛られてしまってもうまく評価できない点など、いろいろ案を出してもらっている。今ある評価基準にプラスにして、これだけのことができていると何点などの補足をつけたほうが教員間のぶれもなくなるかなと思ひ、現在取り組んでいるところ。

意見：大学も見習わないといけない。点数をつけられた生徒からすると基準がわかっているというのはいい。時代は変わっていくのでルーブリックも変えないといけないが、よくやっていると思う。

意見：国際交流は大事なことで、英語の勉強にもなるが、科学的な内容で交流することは、学問の自身について会話ができることが大事。研究はみんなで作るもので、個人で作るものではない。研究を続けていくにはコミュニケーション能力が高くないと情報が手に入らないが、そういったニーズにも気を配られていると思う。

意見：研究について、学校図書館の存在をもう少し前に出してもいいと思う。学校図書館はまさに研究を助ける施設として戦後各学校に作られているが、なかなか活用されていない。研究を進めている学校がどのように図書館を使っているかを他の学校にも見せることができたならとてもインパクトがあると思う。予算とか人の問題があると思うが、探究や研究に図書館を結びつけるのは、他の学校の参考になると思う。

意見：課題研究のテーマ決めについて、教員間のノウハウはまだあまり表には出ていないと思うので、そういう教員間のノウハウを高津高校から地域の小中高校に持っていかれたらインパクトがあると感じた。

質問：海外オンライン交流などについて、海外の生徒がよく話して日本の生徒の時間が少ないということはないか。

回答：IMUは今年から始めてまだこれからだが、去年は確かに高津の生徒の発言は決して多くはなかった。しかし今年はすごく増えたと感じている。8人だけで1時間話さないといけないという状況が話せるようさせていると思う。昨年度はプレゼンテーションがメインだったが、今年は会話をメインにする交流ができたので話せるようになったと思う。

意見：課題研究のテーマ決めは難しいと思う。大学もそうだが、先輩から引き継いだテーマは割とやりやすい。しかし0からスタートした方が、いい結果がでなくても本人にとっては経験をとおしてモチベーションを持ちながら研究できる。先生方が全部を教えるのは難しいと思うのでそこは大学に聞くといいと思う。

意見：大学では生成AIを使っていく話がある。学生のレポートでもAIを使っているものがどんどん出てきている。大学ではポータルでレポートを採点すると、どれだけAIを使っているかの検知機能があり、〇%とかでてくる。しかしそれを成績評価に反映してはいけない。それはAIも間違えることがあるから。今のご時世、生成AIを使わないということはなく、これからどんどん進展していくと思う。そのためには正しく聞いてやらないといい結果を出してくれない。そういう問題

発見能力、質問力を磨いていけばある程度いい結果が出るかもしれない。それをきちんと評価する力がつくような指導をしていただけたらいいと思う。生成AIは間違いも起こすので、慎重に、しかしうまく付き合うとある程度のヒントはくれるので、付き合い方を注意しようと教えるのもいいと思う。

第2回運営指導委員会（令和8年1月30日（金）、本校記念館）記録

- 1、校長挨拶
- 2、管理機関より
- 3、令和7年度SSH活動報告成
高津LCの概要、LCⅡ各分野、科学系部活動、サイエンスツアー、国際交流事業、地域普及事業について各担当者より報告。
- 4、質疑応答・指導助言

意見：全体的には前向きに取り組んでいると思う。確実に進化しているなという感じがする。ルーブリックについて、評価基準を細かく生徒に出して自己チェックができるようにしていれば、彼らも満足でき、先生の手間も省けていいのではないか。また、これだけまじめにやっておられるのを、報告書だけにしておくとそのうち消えてしまう。手間はかかるけど、5年終わったときに本を出してそれを残されると実績にもなると思う。

質問：次期について、取組を新しく作るよりは自走化と普及という話だが、どんなイメージがあるか。

回答：20年間の研究開発の中で指定校の取組をモデル化して、それを他の学校で使えるように、基本は他の高校に向けて波及、普及していくというのを求められている。次期は新規性の量をきそう段階から成熟度および自走化が審査のポイントとなる。大学との縦の連携が求められており、小中も含めるが、ベースは他の高校との横の連携が求められている。

質問：小中の生徒の数が少なく、中高の連携が公立では弱いと思う。私立は中高一貫校があるが、公立学校では中高連携のビジョンはあるか。

回答：府の教育庁と市町村の教育委員会が異なり、府立では中高一貫校は3校しかない。SSH校では横展開が進んでいるので、横展開をしながら小中高と新たに連携し、小学校、中学校時代から科学実験のベースを作り、他の学校と差別化することは新規性があると思われる。

意見：今日の生徒研究発表会で、アメリカで結構有名な高校の探究と高津の探究と何が違うのかという発表があった。探究としてはたいして違いはないが、アメリカでは、最後は社会に働きかけるとこまでやるという、それが驚きだ。考えるだけでなく実際に働きかけるとというのがアメリカ的考え方だと思った。そういうことが部分的にでも高津にもあったらいいと思う。

質問：次のSSHのめざす所としては普及と成熟がキーワードとなってくるということですね。高津はいろいろと現在もテキストの普及や地域への貢献をしているが、これでは不十分なのか。

回答：中間ヒアリングとしては、求められているものを高津高校では十分にやっているという感触だった。

意見：普及とか成熟について、もっと高いレベルを求められるのなら大学と連携するとかあるが、それはすべての生徒には無理で、ある程度かぎられた例えば科学部とか限定しないとそこまでのレベルに追いつかないと思う。今日の発表を聞かせてもらったが、年々しっかりした発表になり、タイトルも興味を持つようなものをつけている。また、仮説をしっかりと立てている。仮説、実証実験、考察をしっかりとやるというシステムが、うまく組み込まれているということを実感した。次の学年が来年度同じようにやってくれると思うが、非常にいいと思った。

質問：今日の発表ではA I活用というキーワードが一切なかったが、A Iをどの程度このシステムに組み込んでいくのか。大学でも教授によって温度差があるが、このシステムの中にA Iと書くマイナス評価になるのか。これからA Iは絶対になくはならず、将来的に諸外国にも勝てなくなると思うが、それをどのように組み込んでいくのか。

回答：個人的にはA Iは調べる時のきっかけになると思う。出てきた答えが正しいかどうかは別として、出てきた回答を検証するという課題もあるのではないかと。実際に今年の班でも、ネットで質問したところA Iモードの回答に疑問を持ち、試してみるという研究があった。調べるツールとして、きっかけの一つとしてはいいのではないかと。これからどんどんA Iが普及して、生徒も使うようになっていく。A Iを使うことを前提として、A Iは信用できない部分がある、使えない部分があると思われるような取組が必要になると思う。

意見：大学ではA Iを結構使っている。3年生ともなると、専門の論文を和訳させるとA Iでやってくる。非常に素晴らしい和訳だが、意味を尋ねても答えられない。使ったからには自分で説明できるように、責任を取らせる。A Iの回答は疑いながら使うことが大事だが、A Iの精度もかなり上がってきており、スピードが圧倒的に早くなって、例えばテーマを考える時に、キーワードを3つくらい打てば、あとはいろんなことを出してくれる。その参考になる情報や文献を出してくれる。今の時代、その中から先生と生徒で正しいかやってみるのも一つの方法かと思う。そうすれば時間は大幅に短縮できると思う。生徒がどのように考えるかはわからないが、大学生ではディスカッションをしてもその場で調べて、すぐに回答を出してくる。そのように少し活用してもいいのではと思う。A Iに使われるのではなくてA Iを使うということを念頭に置いて指導していかないと、結局は置いていかれる。大学に入ったら皆使っているので、先生方自身が経験するということと共に、少くも使っていてもいいのではないかと。そういうのも参考にされて、それを踏まえてさらに良いアイデアを出していくという時代になってきていると思う。反対の意見もあると思う。教授間でもA Iの使い方はまだまだ議論しているが、ダメと言っても生徒は使うので、積極的に使って、もっと高めていく方向に使うべき。

質問：国際交流でも、基本的な会話は学ばないといけないが、翻訳ソフトがあるので、積極的に使っていけば、わからない時などもさらにコミュニケーションがとれると思う。交流会はどう考えているか。

回答：今は、オンライン交流会は1部屋1班ずつで教員がついている。現状ではA Iではなく、教員に相談することもあるが、将来的にはA Iを活用するスタイルもいいかと思う。どのように活用するかは未定だが、将来的には使わないといけないと思う。

○令和7年度 課題研究テーマ一覧（高津LCII）

研究班	研究テーマ	研究班	研究テーマ
国語	27通りに分けて完全分析！最強のコミュニケーションの取り方	数学	高校数学を通して和算をみる
	Oh!!!m hungry!!～やめられない、止まらない、キャッチコピーの魔法～		サンクトペテルブルクのバラドックスを夢のあるゲームにしよう！
	過去のM-1から紐解く、M-1グランプリ2025優勝予想		コラッツ操作における連続する3整数の総試行回数の関係性
	時代背景から読み解く落語『死神』～死神の呪文 無限嵐編～		カプレカー変換に特定の操作を加えた場合の規則性
	標準語の何がええねん！～若者の大阪弁離れ～		最速でボールが転がるn次関数の曲線
	ポジティブな流行語の割合から考える時代の風潮		芒星魔方陣：星と数の交差点
	火垂るの墓から見る、メディアの変化と印象の変化		バラの花びら問題の面積について極限の知識を用いて求める！
	恋心 時代変われど 移ろはず 和泉式部に 学ぶべきかな		封筒バラドックスの解消
	桜と日本の文学的情緒～一瞬の夢に魅せられて～		方程式の代数的可解性について
	日記の書き方しだいでメンタルが...!?～日記が及ぼす影響～		数学によって、ババ抜きを暴く!! 新発見!ババ抜きの定理!
ホントにフロントで食感分析!?～お菓子の食感の印象操作～	三角関数とxの代数関数は同じ性質を持つか ～一次従属で考える～		
一人称MBTI診断!?～一人称と性格の関係～	ラングラーの問題		
社会	心を動かす現代アート！～あんなそれホンマに判断できるん?～	物理	一葉双極面をz軸の周りに回転させた立体の体積
	地理的視点から考える.最強都道府県決定戦!		積み木の重心～どこまでずらすのか?～
	大阪の自転車の未来～安全で便利な自転車ライフ～		曲線の長さvs線分の長さ
	エセ関西弁はなぜ違和感があるのか～エセポイントを探る～		ペットボトルロケットの発射時における二段階噴射と回転について
	公共交通機関の利便性向上のためには～大阪・京都・広島3都市から考える～		シャボン玉を長く飛ばそう ～蒸発から考える～
	大阪五輪～大阪五輪の可能性とそれに伴う日本への影響を多角的視点で捉える～		糸電話と糸の本数の関係
	あなたの町を元気に！～高津生の自治活動から考える町内会の未来～		YBCO超伝導体のSr置換による不純物効果の観測
	高校生へのおすすめファッションを提案～高津生の傾向を基に～		シャープペンシルの芯が折れにくい条件～芯の硬さとの関係～
	最も効果的な広告ってどんなの?～心理的效果を用いて考える～		ものさしに重ねた紙の力
	日本人の固定観念を取り払うには～血液型の偏見からみる～		これからの地震対策～制震ダンパーをより身近に～
英語	“最強”の宣伝方法～塾における費用対効果からみる～	化学	リニアモーターカーの軌道変化～角度と磁石で考えてみる～
	若者の選挙率向上にはどのようなアプローチが有効か		セルフアセンブリを用いた吸着スポンジによるマイクロプラスチックの回収
	～政治的有効性感覚・政治的リテラシー・政党情報の周知の観点から～		丈夫な橋を作ろう～バスタから考える未来に活きる橋の構造～
	高い自給率国における米価上昇要因の比較分析～1日台の比較を通じて～		私たちの身体を冷やす化学物質とは何か～高津生を熱中症から教え!～
	戦争によって自殺率が下がる!?～自殺を引き起こす要因とは～		君ん家のプラちゃんを分別して?比重の違いから見るプラスチックの分別
	情報リテラシー教育の効果～日本と海外の違いから～		ほうれん草のシュウ酸による尿路結石を防げ!～ゆで方による違い～
	主体性を伸ばす教育 ～海外と日本の違い～		酸化亜鉛に代わる物質～打倒紫外線!肌に優しい日焼け止め～
	日本の英語教育に足りないものは?日蘭比較で見る日本の英語教育の課題		最強のEF吸水性ポリマー
	日本におけるこれからの異文化ビジネスについて(シンガポールから学ぶ)		命を繋ぐ化学の糸
	日本と世界の比較から考える 多様性社会の課題とポリコレ批判の実態		地球を救え!～助けてカゼインプラスチックマン～
スマホ時間と学力は反比例!?～SNS使用制限の法律化について～	ダンゴムシはどんな環境が好き??		
各言語による言葉・熟語の切り分け方の違い～英語と日本語に注目する～	虫歯菌の増殖を防ごう!～pHや糖分濃度による影響～		
日本語と英語の愛情表現の違いについて	フードロスストローを作ろう～廃棄されるはずの食材を活用する方法～		
AI vs 人間教師～AIと人間教師の英語授業による成績比較実験～	プラナリアのエサの開発～長期保存できる使いやすいエサを作ろう～		
保健	色で人を操ることができる!?～色彩効果を用いた通行方向の決定～	生物	塩分濃度が乳酸菌の増殖に及ぼす影響
	ゆかしき心地にせしむ「宣伝」～視覚・聴覚への刺激を用いて～		身近な植物から糸を作ろう!!
	集中力を持続させたい!!		植物精油のショウジョウバエに対する忌避効果の検証～忌避数の比較にて～
	ビートで加速!?～音楽が走りを与える謎のパワー～		原形質流動の速度が変化する条件とは?
	ゲームと集中力の関係 ～ゲームの種類や時間が及ぼす影響～		植物と酸性の関係
	最強のスポーツができた!!～今あるスポーツに飽きた貴方へ～		双頭のプラナリアを作る
	心拍数と運動能力に相関関係があるのか		アプリ「DeChain」でスマホ利用を自制する方法を探る
	パフォーマンス向上における精神的要因		自習室の混雑を回避しよう!～入室管理システムへの応用～
	睡眠時間と脈拍数の関係からわかる高津生の健康課題		高津生に向けて ～高津マップから広げる高津生活～
	もう待ち時間は暇じゃない!!～体感時間を早くする自分の行動を探る～		ゲーム依存の原因～難易度と集中力の関係から考える～
音楽	人に流される自分、やめませんか?～多数派に同調しないために～	情報	一番プログラミングに適したAIは
	一緒にいて心地よい関係を築くには～学校生活において～		Studyal.～勉強へのやる気の向上を図る～
	学生が絶対起きられる授業の作り方～高津高校教師陣の声から考える～		上手な時間の使い方～高津生から学ぶ成績アップへの道～
	「不協」で紡ぐ音詩たち～ショパンが巧みに用いた不協和音を探る～		自己肯定感はどうやって高めるの!?～自分を好きになる近道とは～
	次世代に流行るメロディーを作ろう!～backnumberで実験!		シーン別コーディネート提案～高津生の傾向を追って～
	会話の幅を広げよう!!～高津生の音楽の好みとMBTIの関連性～		色彩が味覚に及ぼす影響
	ハーモニーの理想的な組合せとは～カラオケで楽しく且つ上手く歌おう～		食事の色数は栄養バランスの指標となり得るのか～三大栄養素に着目した色数の分析～
	人間とAIが高く評価する曲とは～あなたの十八番を見つけよう!～		低糖類商品をもっと身近に!～抵抗感をやわらげるアプローチ～
			眠気をとばすのはどの動きだ!?～短時間の軽運動が主観的眠気に与える影響～

○令和7年度 課題研究テーマ一覧（高津LCⅢ）

研究班	研究テーマ	研究班	研究テーマ
国語	消えた自称詞～通時的な日本の文献から探る～	数学	面積を一定にしたとき、周の長さを最小にする図形
	中原中也の季節観とそれを表す言葉～詩集「在りし日の歌」より～		コラッツ予想 連続する2整数の総試行回数の関係性
	日本語の解釈の個人差～程度の幅から考える～		n個の無理数を足したものは有理数か
	歌詞から読み解く恋愛観～昭和・平成・令和の移り変わり～		高津高校への最適ルートを数学的に求めよう！！
	新海誠作品における天候の表現による効果		じゃんけんホイホイの手の数をn個に増やしたとき成立するか
	村上春樹を読む～比喻の観点から～		Make10の10をnに置換したときの組み合わせの推移
	原作から考えるハウルの動く城		期待値が必ず大きくなる2つの封筒のパラドクス
	オノマトペ歳時記を作ろう		様々な条件における席替えの確率
	読書で人生を豊かに～読書療法の可能性を探る～		正n角形の面積公式や複雑な図形の面積
	英雄神話物語の特徴(日本編) 機能の分類より		角度・方位による宇宙線到来頻度の差の測定
社会	源氏物語における人物と和歌～和歌が形容する姿～	物理	家の電気代が安くなる！？～新素材発明大作戦～
	色から読むレオ・レオニの作品群～『スイミー』に込められた意味～		最も効率の良い音力発電方法ー音力発電の実用化に向けてー
	政治的関心の向上に向けた政策の提示		期待値が必ず大きくなる2つの封筒のパラドクス
	ごみの分別と仕掛学		CANSATを用いた簡易人工衛星実験
	災害地名によるハザードマップの作成と比較		自転車の動力部を用いた効率的な発電システムの構築
	過疎の未来～過疎地域の特徴から考える～		シャボン玉を物理的観点から考え、応用できるようにする～高い強度を目指して～
	高校生らしさとは～将来の校則の在るべき姿を見据えて～		YBCO超伝導体におけるSr置換の不純物効果について
	推し活と性格の関連性		学校でのYBCO超伝導体1-2-4相及び2-4-7相型の作成
	日本と外国の外国人の政治参加		ドミノの重心による速度の変化
	少年法の改正が世間に与えた影響～他国との比較から考える～		路面状態と摩擦係数の関係性とその考察
英語	ハローキティから考えるブランド戦略	化学	停電しても明るい部屋を～透明度から考える乱反射の最大化～
	地名から考える～災害の危険性と防災に必要なこと～		最強の香水をつくらう～香水の作り方で変わることを探し～
	MBTI別の商品へのより良いマーケティング法		植物の色素から色の三原色を作成しよう
	心理学で働き方改革！～下校時間を守らない生徒を校内から追い出したい～		折れないインシャー芯を作ろう
	CMからわかる国民性の違い		ダイヤモンドを造らう～炭素原子から考える～
	文面における英語能力の必要性～翻訳家による翻訳と機械翻訳の比較～		色素増感太陽電池～最も電流が流れる色素は何か～
	日本とアメリカの笑いのツボや感覚の違い		高吸水性ポリマーの可能性 ～おむつ、それは砂漠を救う
	英語力が上がる英語の授業 ～モチベーションと点数の関係～		空気中のCO ₂ 削減～CO ₂ のリデュース・リユース・リサイクル～
	もう前置詞で間違えない！～コアイメージで捉える前置詞～		砂浜などに含まれるマイクロプラスチックの種類を調べよう
	映画のポスターの違いから読み解く求められているポスターの違い		化学反応による消えるインクをつくらう！～紙のロスを無くしたい男達～
保健	恋愛映画からみる世界各国の愛情表現の違い	生物	胃酸による薬と溶媒の関係～オレンジジュースでも薬を飲みたい！～
	視力up計画		粘菌の輸送ネットワークを通学路に応用してみた！
	睡眠の質を向上するために～体温の変化と睡眠の関係～		移植したプラナリアの記憶の行方
	手に取るようにわかる相手の思考～負けようがない心理戦～		殺菌効果を調べろ！～調味料の可能性～
	ZONE～集中力を上げる方法を掛け合わせる～		コンポストの効率化を図る！微生物の土の中での分解速度の違い
	疲れを癒やす香りの嗅ぎ方		インクラゲのコロニー培養～破れにくい殻をめざして～
	応援がもたらすパフォーマンス能力の向上		光る花って作れるのかい？作れないのかい？どっちなんだい！？
	自覚のあるブラシーボ効果が集中力にもたらす影響		大阪市内の河川の汚染度を微生物で明らかにする
	集中力を引き出せ！～直前の行動が集中力に与える影響～		枯草菌と仲良しな天然農薬を探せ！～持続可能な農業を目指して～
	授業中に寝るな！～最強の眠気対策を探せ～		回し食いをする人数と菌の関係～回し食いついて汚いの？～
音楽	香りによってあなたは最強に～嗅覚から上げるパフォーマンス～	情報	菌糸の成長を妨げよう！！～きのこの生命力を試す～
	前日の行動は翌日の起床の容易さにどのように影響するのか		AIの学習内容による性質の違い
	考えを行動に移せ！LEAPの点数を上げるには…～視覚と聴力の効果～		献立の時短化と利便化
	愛情不足と浮気の関係性～高津生の浮気観から考える～		トレーニングルームの利用者向上
	幼少期の習い事と現在の能力の関係		映画のような小説
	食嗜好と性格の関連性～ビッグファイブ理論から考える～		学習サイトによる学力向上とITによる生産性の変化について
	デジタルデトックスから考えるQOLを向上させる方法		MBTI診断流行の背景～人はなぜ自分を位置付けたがるのか～
	匂いと時間感覚に変化はできるのか		高津高校の魅力とは～志望動機から探る～
	機械に好かれる歌声と人に好かれる歌声の違いとは？		人間の心理～from the bereal～
	ブラックミュージックのビートと変拍子のJ-popへの導入		家庭
次世代のボカロ曲を探る～曲調と流行の関係は？～	おいしい知育菓子		
～音を”感じる”～「聞かない」音楽の楽しみ方	モテる条件		
King Gnuの秘密～アーティストの個性はどこに？～	売れるパッケージデザインとは～インスタ映えから考える～		
最恐の効果音を作ろう！～音楽の7要素をもとに～	授業中眠たくなるのなあぜなあぜ？		
曲と歌声との相性をさぐるよ！			

○今年度使用したルーブリック

「高津LCⅠ」「高津LCⅡ」「高津LCⅢ」で使用したルーブリックを以下に示す。

<高津LCⅠ評価ルーブリック>

・知識・技能に関する評価

SDGsノート 評価ルーブリック

観点	10	8	6	4	2
量	34枚以上のSDGsに関する記事がある。	33～31枚のSDGsに関する記事がある。	30～26枚のSDGsに関する記事がある。	25～21枚のSDGsに関する記事がある。	17枚以上のSDGsに関する記事がある。
メモ	すべての記事に概要と考えたこと書かれており、良く書けている。	すべての記事に概要と考えたこと書かれているが、内容は不十分である。	半数以上の記事に概要と考えたこと書かれており、良く書けている。	半数以上の記事に概要と考えたこと書かれているが、内容は不十分である。	半数以下の記事に概要と考えたことが書かれている。
種類	17種類の目標すべてに関する記事がある。	16～15種類の目標に関する記事がある。	14～11種類の目標に関する記事がある。	10～6種類の目標に関する記事がある。	5種類以下の目標に関する記事がある。

*ノート内に適した評価がない場合は、その評価は0点とする。

探究ノート 評価ルーブリック

観点	5	4	3	2	1
① キーワードの探究	7つの資料を利用した。 7つの資料に多くの事をメモし、分かりやすくまとめた。	6つの資料を利用した。 7つの資料に多くの事をメモしたが、分かりやすくまとめることができなかった。	5つの資料を利用した。 4つ以上の資料に多くの事をメモし、分かりやすくまとめた。	4つの資料を利用した。 4つ以上の資料に多くの事をメモしたが、分かりやすくまとめることができなかった。	3つの資料を利用した。 あまりメモができなかった。
② 研究テーマの決定	目標に向けた長期～短期の現実的なステップを具体的に示した。 5W1Hをすべて記載したが研究対象を十分にピンポイント化でき、研究内容の解像度を高められた。	目標に向けた長期～短期の現実的なステップを具体的に示した。 5W1Hをすべて記載したが研究対象を十分にピンポイント化できなかった。	目標に向けた長期～短期のステップを示したが、現実性または具体性に欠けた。 5W1Hをすべては記載できなかったが、一部の観点はピンポイント化でき、研究内容の解像度を高められた。	目標に向けた長期～短期のステップを示したが、現実性も具体性もなかった。 5W1Hをすべては記載できず、研究対象をピンポイント化することもできなかった。	目標に向けた長期～短期のステップを示したが、現実性も具体性もなかった。 5W1Hを記載できなかった。
③ 研究倫理	4つの資料を分かりやすく示した。 すべての要約を分かりやすく示した。	3つの資料を分かりやすく示した。	2つの資料を分かりやすく示した。 一部要約を分かりやすく示した。	1つの資料を分かりやすく示した。	資料を分かりやすく示せなかった。 要約していない。
④ 仮説の提示	障壁の解決に繋がる具体的なRQを設定できた。 RQの検証・解決に有効かつ自明ではない仮説を示した。	障壁の解決に繋がる具体的なRQを設定できなかった。 RQの検証・解決に有効かつ自明ではない仮説を示した。	障壁の解決に繋がるRQを設定したが、具体性に欠けた。 RQの検証・解決に有効とはいえないが、自明ではない仮説を示した。	障壁の解決に繋がるRQを設定できなかった。 RQの検証・解決に有効とはいえないが、自明ではない仮説を示した。	RQを設定したが、障壁の解決に繋がるとは言い難いものだった。 RQの検証・解決に有効とはいえない、かつ自明な仮説しか示せなかった。
⑤ 仮説に対する根拠の探究	仮説を証明するために必要なデータの特徴と詳細を具体的に示した。 得た結果を用いて極めて深く分析と考察ができた。	仮説を証明するために必要なデータの特徴と詳細を具体的に示した。 得た結果を用いて分析と考察ができた。	仮説を証明するために必要なデータの特徴と詳細を示したが具体性に欠けた。 得た結果を用いて分析と考察ができた。	仮説を証明するために必要なデータの特徴と詳細を示したが具体性に欠けた。 得た結果を用いて分析と考察ができた。	仮説を証明するために必要なデータの特徴と詳細を示せなかった。 分析と考察が十分できなかった。

*ノート内に適した評価がない場合は、その評価は0点とする。

・思考・判断・表現に関する評価

議論技術ワークシート 評価ルーブリック

観点	5	3	1
方法	マンダラートのすべてのマスが埋められている。	マンダラートの半分以上のマスが埋められている。	マンダラートの半分未満のマスしか埋められていない。
結果	6つの関係者とそれぞれの成功について示した。	4つ以上の関係者とそれぞれの成功について示した。	4つ未満の関係者とそれぞれの成功についてしか示せなかった。
考察	次点の関係者とその選定理由を論理的に示した。	次点の関係者とその選定理由を示したが、論理性を欠いていた。	次点の関係者を示せなかった。
結論	文化祭の成功に向けて自らのすべきことを、文化祭の意義も踏まえて示した。	文化祭の成功に向けて自らのすべきことを示した。	文化祭の成功に向けて自らのすべきことを示せなかった。

*適した評価がない場合は、その評価は0点とする。

夏の創造探究事業 小論文評価ルーブリック

観点	5	3	1
目的	自分が立てた問いを理由とともに分かりやすく示した。	問いを立てたが、理由は示せなかった。	問いを立てられなかった。
方法	使用した資料、参考にした講義の詳細を正確に示した。	使用した資料、参考にした講義を示した。	資料を示せなかった。
結果と分析	結果と分析を図表や数値などを使いながら分かりやすく示した。	結果と分析を数値などを使って示した。	結果と分析を示せなかった。
考察	結果と別データを踏まえ、考察ができた。	結果のみから考察した。	考察できなかった。
結論	レポート全体の要約ができた。	レポートの一部の要約ができた。	レポートの要約ができなかった。
引用・参考	正しく示した。	一部正しく示した。	正しく示せなかった。

*適した評価がない場合は、その評価は0点とする。

論文 評価ルーブリック

観点	5	3	1
要約	研究のリサーチクエスチョンと結論がよくわかるようまとめられている。	リサーチクエスチョンなどは読み取れないが、研究の概要がわかるように書かれている。	研究の概要がわかるように書かれていない。
目的1	自分が立てた問いを理由とともに分かりやすく示した。	問いを立てたが、理由は示せなかった。	問いを立てられなかった。
目的2	問いを絞り込み、研究対象の定義を分かりやすく示した。	研究対象の定義を示した。	研究対象の定義を示せなかった。
先行研究	先行研究について内容の概略とともに分かりやすく示した。	先行研究について示した。	先行研究について示せなかった。
仮説	課題解決のための有意義な仮説を示した。	課題解決のための仮説を示した。	課題解決のための仮説を示せなかった。
研究方法	研究を完全に再現できるように、方法を分かりやすく示した。	研究の方法を示した。	研究の方法を示せなかった。
結果と分析	結果と分析を図表や数値などを使いながら分かりやすく示した。	結果と分析を数値などを使って示した。	結果と分析を示せなかった。
考察	別のデータと分析結果を比較して考察を示した。	分析結果から考察を示した。	考察を示せなかった。
結論	研究全体の要約と振り返りを分かりやすく示した。	研究全体の要約と振り返りを示した。	研究全体の要約と振り返りを示せなかった。
引用・参考	文献リストについて、筆者やタイトル、参照日など正しく示した。	文献リストを示したが、URLのみ示すなど不十分であった。	文献リストを示せなかった。

*適した評価がない場合は、その観点は0点とする。

主体的に学習に取り組む態度に関する評価

創造探究事業 参加に関する評価ルーブリック

観点	30	20	10
参加実績	3つ以上の事業に参加した。	2つの事業に参加した。	1つの事業に参加した。

創造探究事業 レポートに関する評価ルーブリック

観点	10	5	0
レポート1枚につき	内容や考察を交え、レポートとしての完成度が高い。	内容や考察の記述があるがレポートとしての完成度は低い。	内容や感想の記述のみで不十分である。

*多数のレポートを提出した場合も、レポートの合計点の上限は40点とする。

*レポートの再提出を認める。

各課題 評価ルーブリック

観点	5	1
夏季小論文課題	期日までに提出し、完成されている。	提出できたが、期日に間に合わなかった。または、期日までに提出したが完成されていない。
SDGs ノート	期日までに提出し、完成されている。	提出できたが、期日に間に合わなかった。または、期日までに提出したが完成されていない。
探究ノート1次提出	期日までに提出し、指定のページまで作成されている。	提出できたが、期日に間に合わなかった。または、期日までに提出したが指定のページまで作成されていない。
探究ノート2次提出	期日までに提出し、指定のページまで作成されている。	提出できたが、期日に間に合わなかった。または、期日までに提出したが指定のページまで作成されていない。
探究ノート最終提出	期日までに提出し、完成されている。	提出できたが、期日に間に合わなかった。または、期日までに提出したが完成されていない。
論文	期日までに提出し、完成されている。	提出できたが、期日に間に合わなかった。または、期日までに提出したが完成されていない。

*適した評価がない場合は、その評価は0点とする。

<高津LCII評価ルーブリック>

前期	観点	4 特に秀でた成果	3 優秀な成果	2 一般的な成果	1 不良な成果
研究基礎	① テーマ決定【知】	テーマを決定するために、班内もしくは同じ科目内で非常に建設的な意見交換を何度も行い、マインドマップ等を使い、多くの可能性を模索した。	テーマを決定するために、班内もしくは同じ科目内で建設的な意見交換を行い、マインドマップ等を使い、多くの可能性を模索した。	テーマを決定するために、班内もしくは同じ科目内で意見交換を行い、マインドマップ等を使い可能性を模索した。	テーマを決定するために、班内もしくは同じ科目内で効果的な意見交換は行われなかった。
	② テーマ学習【知】	テーマについて、定義を明確にし、関連する事象も含め、多角的な複数の資料を広く深く調査した。	テーマについて、定義を明確にし、関連する事象も含め、複数の資料を広く深く調査した。	テーマについて、定義を明確にし、関連する事象も含め、ある程度調査した。	テーマについて、定義が明確でなく、関連する事象も含め、調査が不足していた。
	③ 課題発見【知】	テーマの内容をよく理解し、複数の課題を発見したのち、最も重要な課題を発見した。	テーマの内容をよく理解し、複数の課題を発見した。	テーマの内容をよく理解し、課題を発見した。	テーマの内容をよく理解せず、課題を発見できなかった。
	④ 研究倫理【知】	テーマの学習に使用した資料のすべては、信頼性が高く、すべて情報元を記録している。	テーマの学習に使用した資料の多くは、信頼性が高く、すべて情報元を記録している。	テーマの学習に使用した資料の多くは、信頼性が高く、ある程度情報元を記録している。	テーマの学習に使用した資料は、信頼性が低く、情報元も記録していない。
調査・研究手法	⑤ 研究テーマ設定【知】	研究対象をよく理解して、なおかつ高校生らしい着眼点や発想でオリジナリティのある研究テーマを設定している。	研究対象をよく理解して、研究テーマを設定している。	研究テーマを設定しているが、研究対象の理解には改善の余地がある。	研究対象の理解度および研究テーマの設定の深さが不十分である。
	⑥ 先行事例調査【知】	先行研究・調査の知見が適切に整理されており、先行研究の課題を明らかにした上で、本研究を極めて的確に位置づけている。	先行研究・調査の知見が適切に整理されており、本研究を的確に位置づけている。	先行研究・調査の知見を整理した上で、本研究を位置づけている。	先行研究・調査にあたっては、量が不足しており、本研究の位置づけが不明確である。
	⑦ 研究手法の設定【知】	新たな研究・調査方法を導き出すなど、極めて斬新な研究方法を追求しようとしている。	調査・研究対象に対して、先行事例も参考に、最適な調査・研究方法を用いようとしている。	授業で学んだ知識を活用した研究・調査方法を用いている。	研究・調査方法が不適切である。
	⑧ 研究手法の活用【知】	調査・研究手法の特徴を理解し、組み合わせながら精度の高い結果が得られるように活用している。	調査・研究手法の特徴を理解し、精度の高い結果が得られるように活用している。	調査・研究手法の特徴を理解し、適切に活用している。	調査・研究手法の特徴を理解せずに使用している。
研究ノート	⑨ ノートの活用【主】	課題研究ノートの管理を適切に行い、記入上の注意をすべて守って活用した。また、すべての活動内容が記載されていた。	課題研究ノートの管理を適切に行い、記入上の注意をすべて守って活用した。また、おおよその活動内容が記載されていた。	課題研究ノートの管理を適切に行い、記入上の注意を守って活用した。また、おおよその活動内容が記載されていた。	課題研究ノートの管理が杜撰で、記入上の注意も守られていない。または、多くの活動内容が詳細に記載されなかった。
授業態度	⑩ 授業への取組【主】	研究に対して特に秀でた意欲・積極性があった。また、課題の提出期限等も厳守した。	研究に対して意欲・積極性があった。また、課題の提出期限等も厳守した。	研究への意欲・積極性がある程度あった。また、課題の提出期限等も厳守した。	研究への意欲・積極性が不十分であった。また、課題の提出期限等が守れなかった。

*評価内容に沿う活動がない場合は、0点とする。

*班活動の場合、項目によっては、個別で評価する。

*「観点」内の略称は、観点別評価の各観点を表す。【知】：「知識及び技能」、【思】：思考力・判断力・表現力等、【主】：主体的に学習に取り組む態度

中間発表会	4 特に秀でた成果	3 優秀な成果	2 一般的な成果	1 不良な成果
研究方法【思】	仮説を検証するにあたって、研究方法が極めて妥当であり、優れた着眼点から研究がなされており、他の研究への応用が期待できる。	仮説を検証するにあたって、研究方法が十分に妥当であり、優れた着眼点から研究がなされている。	仮説を検証するにあたって、研究方法が妥当である。	研究方法が示されているだけであり、仮説の検証には不十分な点が含まれている。
結果・考察【思】	複数の結果に対して緻密な分析を行い、論理的な考察がなされ、課題に対しての説得力がある。	結果に対しての分析が適切であり、飛躍なく考察がなされており、課題に対しての説得力がある。	結果に対しての分析が適切であり、飛躍なく考察がなされている。	結果に対しての分析が不十分で、考察に飛躍がある。
発表資料【思】	フォントや色彩が配慮された見やすい構成で、図やグラフなどが理解を助け、聴衆の興味を引き出すことができている。	見やすい構成で、図やグラフが理解を助け、聴衆に伝わりやすい表現の工夫が十分にみられる。	図やグラフが理解を助け、聴衆に伝わりやすい表現の工夫がみられる。	図やグラフの扱いが不十分で、聴衆が理解しにくい表現があり、必要な情報が不足している。
発表全体のわかりやすさ【思】	発表の内容が非常にわかりやすく、理解ができ、それに伴って有意義な質疑応答が可能となっていた。	発表の内容がわかりやすく、理解ができ、それに伴って質疑応答が可能となっていた。	発表の内容がわかりやすく、理解ができた。	発表の内容に改善点があった。
発表態度【主】	姿勢や視線、声の大きさなど、秀でて聴衆をひきつける工夫があった。また、質疑の趣旨を理解し、簡潔かつ適切な応答ができた。	姿勢や視線、声の大きさなど、聴衆をひきつける工夫があった。また、質疑の趣旨を理解し、適切な応答ができた。	姿勢や視線、声の大きさなど、聴衆をひきつける工夫があった。また、質疑に適切な応答ができた。	単調で集中させる工夫がなされなかった。または、質疑の趣旨を理解できず、十分な応答ができなかった。

*評価内容に沿う活動がない場合は、0点とする。

*班活動の場合、項目によっては、個別で評価する。

*「観点」内の略称は、観点別評価の各観点を表す。【知】：「知識及び技能」、【思】：思考力・判断力・表現力等、【主】：主体的に学習に取り組む態度

後期	観点	4 特に秀でた成果	3 優秀な成果	2 一般的な成果	1 不良な成果
調査・研究手法	① 研究手法の設定【知】	新たな研究・調査方法を導き出すなど、極めて斬新な研究方法を追求しようとしている。	調査・研究対象に対して、先行事例も参考に、最適な調査・研究方法を用いようとしている。	授業で学んだ知識を活用した研究・調査方法を用いている。	研究・調査方法が不適切である。
	② 研究手法の活用【知】	調査・研究手法の特徴を理解し、組み合わせながら精度の高い結果が得られるように活用している。	調査・研究手法の特徴を理解し、精度の高い結果が得られるように活用している。	調査・研究手法の特徴を理解し、適切に活用している。	調査・研究手法の特徴を理解せずに使用している。
研究展開	③ 結果のまとめ方【思】	収集した資料やデータを解釈・分析するため、複数の適切な図やグラフ等の資料を作成して組み合わせ、結論を導くために活用した。	収集した資料やデータを解釈・分析するため、適切な図やグラフ等の資料を作成して、結論を導くために活用した。	収集した資料やデータを解釈・分析するため、図やグラフ等の資料を作成して、結論を導くために活用した。	収集した資料やデータを十分に解釈・分析しきれておらず、結論を導きだすために活用していない。
	④ 考察の深さ【思】	調査・実験結果が導かれた要因を分析し、複数の先行事例や他の要因と比較・検討を重ねて新たな課題も発見した。	調査・実験結果が導かれた要因を分析し、先行事例や他の要因との比較などを含めて複数考察した。	調査・実験結果が導かれた要因を分析し、先行事例との比較などを含めて考察した。	調査・実験結果が導かれた要因について考察できなかった。
	⑤ 論理的思考【思】	結論やまとめが複数の根拠に基づいて示されており、論理的に飛躍もなく主張が展開できた。	結論やまとめが根拠に基づいて示されており、論理的に飛躍もなく主張が展開できた。	結論やまとめが根拠に基づいて示されており、論理的に主張が展開できた。	結論やまとめが示されているものの、根拠が不十分である。主張の展開の論理性が弱い。
発表	⑥ 発表資料【思】	フォントや色彩、配置が配慮された見やすい構成で、図やグラフ等が考察や結果の理解を助け、秀でて聴衆の興味や理解を深めることができた。	見やすい構成で、図やグラフ等が考察や結果の理解を助け、聴衆の興味や理解を非常に深めることができた。	見やすい構成で、図やグラフ等が考察や結果の理解を助け、聴衆の興味や理解を深めることができた。	構成が悪く、図やグラフ等も不適切で聴衆が理解しにくかった。
	⑦ 発表態度および質疑応答【思】	姿勢や視線、声の大きさなど、秀でて聴衆をひきつける工夫があった。また、質疑の趣旨を理解し、簡潔かつ適切な応答ができた。	姿勢や視線、声の大きさなど、聴衆をひきつける工夫があった。また、質疑の趣旨を理解し、適切な応答ができた。	姿勢や視線、声の大きさなど、聴衆をひきつける工夫があった。また、質疑に適切な応答ができた。	単調で聴衆をひきつける工夫がなされなかった。または、質疑の趣旨を理解できず、十分な応答ができなかった。
	⑧ 研究要旨【思】	図やグラフ等、読者の理解を助ける工夫が含まれ、秀でてわかりやすく構成されていた。	図やグラフ等、読者の理解を助ける工夫が含まれ、わかりやすく構成されていた。	わかりやすく構成されていた。	構成が煩雑でわかりにくかった。
研究ノート	⑨ ノートの活用【主】	課題研究ノートの管理を適切に行い、記入上の注意をすべて守って活用した。また、記入は輪番で回され、すべての活動内容が記載されていた。	課題研究ノートの管理を適切に行い、記入上の注意をすべて守って活用した。また、記入は輪番で回され、おおよその活動内容が記載されていた。	課題研究ノートの管理を適切に行い、記入上の注意を守って活用した。また、記入は輪番で回され、おおよその活動内容が記載されていた。	課題研究ノートの管理が杜撰で、記入上の注意も守られていない。または、記入は輪番で回されず、多くの活動内容が詳細に記載されなかった。
授業態度	⑩ 授業への取り組み【主】	研究に対して特に秀でた意欲・積極性があった。また、課題の提出期限等も厳守した。	研究に対して意欲・積極性があった。また、課題の提出期限等も厳守した。	研究への意欲・積極性がある程度あった。また、課題の提出期限等も厳守した。	研究への意欲・積極性が不十分であった。また、課題の提出期限等が守れなかった。
	⑪ 班員の積極性【主】	授業に非常に前向きに取り組み、他の班員や教員等と連携を密にとり、課題解決に向けて取り組んだ。	授業に前向きに取り組み、他の班員や教員等と連携をとって、課題解決に向けて取り組んだ。	授業への取組が自発的ではなかったが、他の班員や教員等と連携をとって、課題解決に向けて取り組んだ。	授業の取組に問題があった。

*評価内容に沿う活動がない場合は、0点とする。

*班活動の場合、項目によっては、個別で評価する。

*「観点」内の略称は、観点別評価の各観点を表す。【知】：知識及び技能，【思】：思考力・判断力・表現力等，【主】：主体的に学習に取り組む態度

<高津LCⅢ評価ルーブリック>

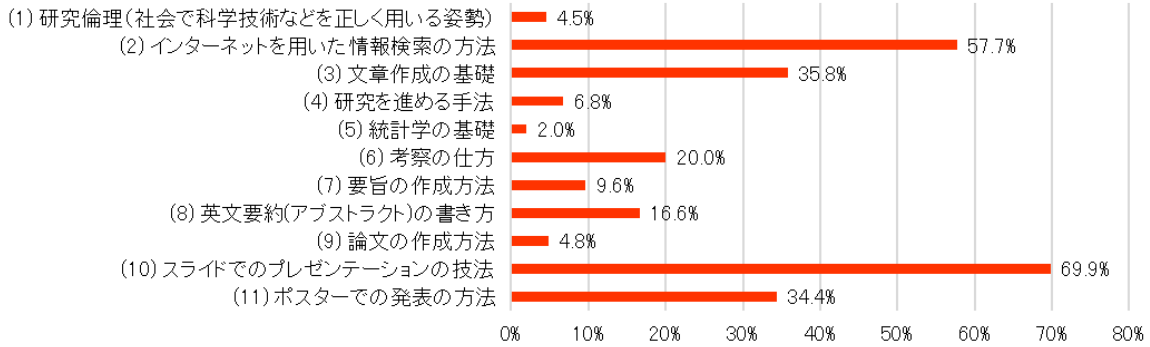
		観点		4 特に秀でた成果	3 優秀な成果	2 一般的な成果	1 不良な成果
取組 に 関 し て	提出	①	提出【主】	期限内に提出した。	提出した。		
		②	研究の深化【主】	有効な追調査や追実験を行い、研究内容をさらに深化させたうえで、論文にまとめた。	追調査や追実験を行ったうえで、論文にまとめた。	研究内容を論文にまとめた。	論文にまとめられなかった。
	③	班員の活動【主】	論文作成に非常に前向きに取り組み、特に秀でた積極性があった。	論文作成に前向きに取り組み、積極性があった。	論文作成に取り組んだ。	論文作成に取り組めなかった。	
内 容 に 関 し て	創造性	④	テーマ【知】	研究テーマ設定の着眼点が述べられ、全体を通して既存の研究を大きく上回る内容がみられる。	研究テーマ設定の着眼点が述べられ、一部に既存の研究と異なる内容がみられる。	研究テーマ設定の着眼点が述べられている。	テーマについて述べられていない。
		⑤	課題の記述【知】	興味を持った分野を深く調べ、関連性のある複数の具体的な課題が述べられている。	興味を持った分野を調べ、関連性のある具体的な課題が述べられている。	興味を持った分野が述べられている。	興味を持った分野が述べられていない。
	探究プロセス	⑥	仮説の設定【知】	課題に対して、複数の解決策や可能性を述べ、その中から仮説を設定し、その理由も述べられている。	課題に対して、仮説を設定し、その理由も述べられている。	仮説や研究の見通しについて述べられている。	仮説や研究の見通しについて述べられていない。
		⑦	研究根拠【知】	自らが立てた仮説の解明のための取組が述べられ、課題との因果関係や関連性が複数述べられている。	自らが立てた仮説の解明のための取組が述べられ、課題との因果関係や関連性も述べられている。	自らの取組が述べられている。	自らの取組が述べられていない。
	系統的 理解	⑧	先行研究【知】	複数の先行研究を参考にし、先行研究とのつながりについても適切に述べられている。	複数の先行研究を参考にしているが、そのつながりについて、適切には述べられていない。	参考にした先行研究が述べられている。	参考にした先行研究が述べられていない。
		⑨	結果【思】	結果がすべて文章で述べられ、図・表・グラフなどを適切に使用しており理解しやすい。	結果がすべて文章で述べられている。また、図・表・グラフなどを使用して理解しやすくする工夫がみられるが、分かりにくい部分がある。	結果がすべて示されている。	結果が示されていない。
	考察・ 結論	⑩	考察過程【思】	結果と他のデータを比較し、その解釈に飛躍がなく、論理的に述べられている。	結果の解釈に飛躍がなく、論理的に述べられている。	結果の解釈が述べられているが、飛躍がある。	結果の解釈が述べられていない。
		⑪	結論の内容【思】	結論の項目が独立して構成されており、課題、方法、結果など全内容が要約して述べられている。また、自ら設定した仮説に対する評価も述べられている。	結論の項目が独立して構成されており、一部の内容が要約して述べられている。また、自ら設定した仮説に対する評価も述べられている。	結論の項目が独立して構成されており、一部の内容が要約して述べられている。	結論が要約して述べられていない。
	文章 表記	⑫	文章表記【思】	口語表現がなく、文末の時制が各項目の内容と一致している。各項目の内容は分かりやすく表記され、文章量も適切である。	口語表現がほぼなく、文末の時制も各項目の内容とほぼ一致している。しかし、一部に分かりにくい表記がある。または、文章量に少なすぎる部分がある。	一部に口語表現が残っている。または、文末の時制と各項目の内容に不一致がみられる。	口語表現や時制の不一致が多く残っている。
		⑬	論文としての完成度【思】	自分の意見と他者の意見(引用)は区別して述べられている。また、引用はルールに則り適切に行われている。	自分の意見と他者の意見(引用)は区別して述べられているが、引用のルールが不十分である。	自分の意見と他者の意見(引用)を混在して述べている部分がある。	多くの箇所、自分の意見と他者の意見(引用)を混在して述べている。

*班活動の場合、項目によっては、個別で評価する。

*「観点」内の略称は、観点別評価の各観点を表す。【知】：知識及び技能、【思】：思考力・判断力・表現力等、【主】：主体的に学習に取り組む態度

○「高津LCI」の授業を行うにあたっての学習状況調査および生徒の自己技能評価

中学校までに学習した生徒の割合



(1)① 研究実施・論文執筆において何が不正にあたるか判断できる	できる	3.1%	(6) 情報や事実を整理し、論理的に組み立てたうえで考察することができる	できる	11.5%
	まあできる	42.5%		まあできる	51.0%
	あまりできない	42.5%		あまりできない	33.2%
	できない	11.8%		できない	4.2%
(1)② 研究実施・論文執筆において先行研究の引用を適切に行うことができる	できる	6.2%	(7) 研究等において取り組んだ内容を簡潔にまとめることができる	できる	14.6%
	まあできる	45.1%		まあできる	62.0%
	あまりできない	40.3%		あまりできない	21.7%
	できない	8.5%		できない	1.7%
(2)① インターネットやデータベース等から必要な情報を効率的に探し出すことができる	できる	14.9%	(8) 研究等において取り組んだ内容を英語で要約(アブストラクト)することができる	できる	4.8%
	まあできる	61.4%		まあできる	19.4%
	あまりできない	20.6%		あまりできない	39.7%
	できない	3.1%		できない	36.1%
(2)② 情報源の信頼性や情報の正確性を判断できる	できる	16.3%	(9)① 論文作成において、適切な章や項目を立てて、全体の文章構成ができる	できる	7.6%
	まあできる	56.1%		まあできる	47.9%
	あまりできない	25.1%		あまりできない	36.3%
	できない	2.5%		できない	8.2%
(3) 文章作成において、伝えたい内容を整理し、適切な根拠を示したうえで主張することができる	できる	15.2%	(9)② 論文作成において、論理的かつ正確に研究内容を表現することができる	できる	5.6%
	まあできる	57.2%		まあできる	43.1%
	あまりできない	25.9%		あまりできない	43.4%
	できない	1.7%		できない	7.9%
(4)① 研究を進めるうえで、リサーチエッセイや仮説を適切に設定できる	できる	7.9%	(10) スライドを用いた発表において、自分の考えや情報を相手に分かりやすく、魅力的に伝えることができる	できる	16.1%
	まあできる	42.5%		まあできる	47.6%
	あまりできない	44.8%		あまりできない	33.0%
	できない	4.8%		できない	3.4%
(4)② 研究を進めるうえで、設定したリサーチエッセイや仮説を検証するために適切な方針を立てることができる	できる	6.5%	(11) ポスターを用いた発表において、自分の考えや情報を相手に分かりやすく、魅力的に伝えることができる	できる	13.2%
	まあできる	46.5%		まあできる	45.6%
	あまりできない	41.7%		あまりできない	35.5%
	できない	5.4%		できない	5.6%
(5) Excelや統計ソフト等を用いて、データを適切に処理することができる	できる	5.9%			
	まあできる	20.8%			
	あまりできない	50.1%			
	できない	23.1%			

回答数
n = 355

○高津LCIの授業効果について

LCIの授業の効果について

(1.とても向上した 2.やや向上した 3.あまり向上しなかった 4.全く向上しなかった)
のうち、1+2の割合

	今年度
	80期
(1) 研究倫理について	75%
(2) インターネットを用いた情報検索の方法について	89%
(3) 文章作成の基礎について	86%
(4) 研究を進める手法について	83%
(5) 統計学の基礎について	68%
(6) 考察の仕方について	84%
(7) 要旨の作成方法について	78%
(8) 英文要約(アブストラクト)の書き方について	67%
(9) 論文の作成方法について	82%
(10) プレゼンテーションの技法について	75%
(11) ポスター発表の方法について	62%
(1)~(11)の平均	年度平均 79%

回答数
n = 299

○高津LCⅡの授業効果について

課題研究における興味・関心、取り組む姿勢、能力の向上について

(1.大変増した 2.やや増した 3.効果がなかった 4.元々高かった)
のうち、1～3の計に対する割合

		今年度
		79期
(1)未知の事柄への興味(好奇心)	(1のみ)	32%
	(1+2)	81%
(2)科学技術、理科・数学の理論・原理への興味	(1のみ)	24%
	(1+2)	74%
(3)理科実験への興味	(1のみ)	28%
	(1+2)	73%
(4)観測や観察への興味	(1のみ)	22%
	(1+2)	73%
(5)学んだ事を応用することへの興味	(1のみ)	26%
	(1+2)	79%
(6)社会で科学技術を正しく用いる姿勢	(1のみ)	21%
	(1+2)	72%
(7)自分から取り組む姿勢 (自主性、やる気、挑戦心)	(1のみ)	29%
	(1+2)	84%
(8)周囲と協力して取り組む姿勢 (協調性、リーダーシップ)	(1のみ)	36%
	(1+2)	87%
(9)粘り強く取り組む姿勢	(1のみ)	37%
	(1+2)	86%
(10)独自なものを創り出そうとする姿勢(独創性)	(1のみ)	29%
	(1+2)	81%
(11)発見する力(問題発見力、気づく力)	(1のみ)	27%
	(1+2)	83%
(12)問題を解決する力	(1のみ)	25%
	(1+2)	83%
(13)真実を探って明らかにしたい気持ち (探究心)	(1のみ)	30%
	(1+2)	84%
(14)考える力(洞察力、発想力、論理力)	(1のみ)	31%
	(1+2)	85%
(15)成果を発表し伝える力 (レポート作成、プレゼンテーション)	(1のみ)	34%
	(1+2)	81%
(16)国際性(英語による表現力、国際感覚)	(1のみ)	17%
	(1+2)	54%
年度平均(1のみ)		27%
		(1+2) 78%

今年度
n = 183

OSSH事業に関するアンケート 生徒集計結果

調査対象は、1年生全生徒（359名）、2年生文理学科理科生徒および科学系部活動部員（201名）、3年生文理学科理科生徒および科学系部活動部員（178名）である。表中の数値(%)は、選択肢「1.とてもそう思う 2.ややそう思う 3.あまりそう思わない 4.全くそう思わない」のうち、標記のないものは「1または2」と回答した生徒の割合を示す。なお、灰色網掛け部分は過年度の調査結果である。

取組の効果について(生徒)

(1.とてもそう思う 2.ややそう思う 3.あまりそう思わない 4.全くそう思わない)
のうち、1+2の割合

	1年 (80期)	2年(79期)		3年(78期)		全体		
		1年次	2年次	1年次	2年次			
(1)科学技術、理科・数学の面白そうな取組に参加できた	61%	84%	52%	85%	89%	72%	74%	
(2)科学技術、理科・数学に関する能力やセンス向上に役立った	60%	75%	47%	81%	79%	67%	70%	
(3)理系学部への進学に役立った	76%	78%	76%	84%	83%	71%	79%	
(4)大学進学後の志望分野探しに役立った	85%	83%	81%	84%	88%	76%	84%	
(5)将来の志望職種探しに役立った	83%	81%	78%	72%	81%	70%	80%	
(6)国際性の向上に役立った	79%	67%	75%	57%	64%	61%	70%	
(7)社会の問題をより身近に感じるようになった	80%	78%	76%	73%	76%	75%	78%	
(8)社会や地球全体の問題解決のために自らが行動しなければならないと感じるようになった	78%	76%	76%	73%	74%	70%	76%	
(1)~(8)の平均	年度平均	75%	78%	70%	76%	79%	70%	76%

A. 興味・関心・意欲について

(1.大変増した 2.やや増した 3.効果がなかった 4.元々高かった)
のうち、1~3の計に対する割合

	1年 (80期)	2年(79期)		3年(78期)		全体	
		1年次	2年次	1年次	2年次		
SSHの取組に参加したことで、科学技術に対する興味・関心・意欲が増したか。	(1のみ) 19%	32%	17%	42%	35%	26%	28%
	(1+2) 76%	79%	68%	89%	87%	79%	80%
(大変増した+やや増した+元々高かった)の割合	76%	79%	69%	89%	88%	80%	81%

B. 生徒の興味について

(1.大変増した 2.やや増した 3.効果がなかった 4.元々高かった)
のうち、1~3の計に対する割合

	1年 (80期)	2年(79期)		3年(78期)		全体	
		1年次	2年次	1年次	2年次		
(1)未知の事柄への興味(好奇心)	(1のみ) 32%	38%	27%	43%	41%	36%	36%
	(1+2) 84%	87%	83%	90%	90%	85%	86%
(2)科学技術、理科・数学の理論・原理への興味	(1のみ) 19%	29%	13%	43%	31%	25%	28%
	(1+2) 71%	80%	64%	88%	82%	73%	78%
(3)理科実験への興味	(1のみ) 19%	26%	13%	45%	33%	24%	28%
	(1+2) 68%	77%	60%	90%	82%	67%	77%
(4)観測や観察への興味	(1のみ) 17%	25%	15%	35%	28%	22%	24%
	(1+2) 67%	78%	64%	85%	78%	66%	75%
(5)学んだ事を応用することへの興味	(1のみ) 24%	33%	19%	37%	30%	31%	30%
	(1+2) 78%	83%	77%	88%	84%	84%	82%
年度平均 (1のみ)	22%	30%	18%	41%	32%	27%	29%
(1+2)	74%	81%	69%	88%	83%	75%	80%
(大変増した+やや増した+元々高かった)の割合	75%	81%	71%	89%	84%	76%	80%

生徒の姿勢について

(1.大変増した 2.やや増した 3.効果がなかった 4.元々高かった)
のうち、1～3の計に対する割合

	1年 (80期)	2年(79期)		3年(78期)			全体	
			1年次		2年次	1年次		
(1)社会で科学技術を正しく用いる姿勢 (1のみ) (1+2)	23%	28%	16%	38%	28%	26%	28%	
	72%	78%	69%	83%	79%	74%	76%	
(2)自分から取り組む姿勢 (自主性、やる気、挑戦心) (1のみ) (1+2)	30%	32%	25%	39%	35%	34%	33%	
	83%	88%	81%	89%	87%	87%	86%	
(3)周囲と協力して取り組む姿勢 (協調性、リーダーシップ) (1のみ) (1+2)	28%	35%	26%	36%	37%	34%	32%	
	83%	89%	83%	83%	87%	78%	85%	
(4)粘り強く取り組む姿勢 (1のみ) (1+2)	29%	38%	22%	36%	37%	29%	33%	
	86%	89%	78%	88%	87%	78%	87%	
(5)独自なものを創り出そうとする姿勢(独創性) (1のみ) (1+2)	23%	31%	19%	39%	30%	29%	29%	
	81%	85%	79%	88%	85%	76%	84%	
年度平均 (1のみ) (1+2)	27%	33%	21%	37%	34%	30%	31%	
	81%	86%	78%	86%	85%	79%	84%	
(大変増した+やや増した+元々高かった)の割合		82%	86%	79%	87%	85%	79%	84%

生徒の能力について

(1.大変増した 2.やや増した 3.効果がなかった 4.元々高かった)
のうち、1～3の計に対する割合

	1年 (80期)	2年(79期)		3年(78期)			全体	
			1年次		2年次	1年次		
(1)発見する力(問題発見力、気づく力) (1のみ) (1+2)	25%	34%	19%	33%	35%	28%	30%	
	85%	85%	80%	86%	84%	79%	85%	
(2)問題を解決する力 (1のみ) (1+2)	26%	28%	19%	32%	31%	27%	28%	
	86%	85%	80%	88%	88%	84%	86%	
(3)真実を探って明らかにしたい気持ち(探究心) (1のみ) (1+2)	32%	36%	27%	45%	36%	40%	36%	
	86%	88%	82%	88%	85%	84%	87%	
(4)考える力(洞察力、発想力、論理力) (1のみ) (1+2)	29%	34%	23%	46%	37%	36%	35%	
	89%	88%	82%	90%	88%	86%	89%	
(5)成果を発表し伝える力 (レポート作成、プレゼンテーション) (1のみ) (1+2)	22%	37%	25%	38%	38%	30%	30%	
	82%	86%	80%	87%	87%	76%	84%	
(6)国際性(英語による表現力、国際感覚) (1のみ) (1+2)	21%	23%	14%	23%	23%	24%	22%	
	71%	64%	62%	70%	58%	64%	69%	
年度平均 (1のみ) (1+2)	26%	32%	21%	36%	33%	31%	30%	
	83%	83%	78%	85%	82%	79%	83%	
(大変増した+やや増した+元々高かった)の割合		83%	83%	78%	85%	82%	80%	84%

○自己評価票による調査 生徒集計結果

生徒自身が自分の興味・関心、姿勢、能力を5段階で自己評価する。自己評価が最も高い場合を5、低い場合を1として回答し、対象は全学年の全生徒である。調査結果から、学年別の平均点に加え、各学年の文系・理系別の平均点を算出した。文系・理系選択は2年生からであるため、本来は1年生の文系・理系別の平均点は算出できないが、翌年度の文系・理系選択希望をもとに、1年生に関しても2・3年生と同様に文理別の平均点を概算した。ただし、黒地白抜き数値が今年度のもの、白地黒数値が過年度のものである。なお、調査した17項目は以下の通り。

- | | |
|-------------------------------|----------------------------|
| (1)科学技術に対する興味・関心・意欲 | (2)未知の事柄への好奇心 |
| (3)科学技術、理科・数学の理論への興味 | (4)理科実験への興味 |
| (5)観測や観察への興味 | (6)学んだことを応用することへの興味 |
| (7)社会で科学技術を正しく用いる姿勢 | (8)自分から取り組む姿勢(自主性・やる気・挑戦心) |
| (9)周囲と協力して取り組む姿勢(協調性・リーダーシップ) | |

- (10)粘り強く取り組む姿勢 (11)独自なものを創り出そうとする姿勢(独創性)
 (12)発見する力(問題発見力・気づく力) (13)問題を解決する力
 (14)真実を知って明らかにしたい気持ち(探究心) (15)考える力(洞察力・発想力・論理力)
 (16)成果を発表し、伝える力(レポート力・プレゼンテーション力)
 (17)国際性(英語による表現力・国際感覚)

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
1年(80期)	3.5	3.9	3.4	3.4	3.5	3.7
2年(79期)	3.3	3.9	3.3	3.3	3.4	3.8
	1年次	3.4	3.8	3.3	3.3	3.6
3年(78期)	3.7	4.2	3.6	3.7	3.7	4.0
	2年次	3.5	4.1	3.4	3.4	3.9
	1年次	3.7	4.1	3.6	3.5	3.9
1年(80期) 文系 (志望者)	2.8	3.7	2.7	2.8	3.1	3.5
2年(79期) 文系	2.8	3.8	2.6	2.6	2.9	3.7
	1年次	2.9	3.7	2.7	2.7	3.5
3年(78期) 文系	3.2	4.0	3.1	3.2	3.3	3.9
	2年次	2.8	3.8	2.5	2.6	3.6
	1年次	3.0	3.8	3.0	2.8	3.6
1年(80期) 理系 (志望者)	3.9	4.0	3.8	3.8	3.7	3.9
2年(79期) 理系	3.8	4.0	3.8	3.7	3.7	3.9
	1年次	3.7	3.9	3.8	3.8	3.7
3年(78期) 理系	4.1	4.3	4.1	4.2	4.0	4.2
	2年次	4.0	4.3	4.0	4.0	4.1
	1年次	4.2	4.3	4.1	4.0	4.1

	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	
1年(80期)	3.6	3.9	3.8	3.9	3.7	
2年(79期)	3.5	4.0	4.0	4.0	3.8	
	1年次	3.5	3.7	3.8	3.7	3.6
3年(78期)	3.8	4.1	4.0	4.0	4.0	
	2年次	3.6	3.9	4.0	3.9	3.9
	1年次	3.7	3.9	3.9	3.8	3.8
1年(80期) 文系 (志望者)	3.2	3.9	3.7	3.9	3.7	
2年(79期) 文系	3.3	3.9	4.0	3.9	3.7	
	1年次	3.4	3.8	3.9	3.7	3.6
3年(78期) 文系	3.6	4.0	4.0	4.0	4.0	
	2年次	3.2	3.7	3.8	3.8	3.7
	1年次	3.3	3.8	3.9	3.7	3.8
1年(80期) 理系 (志望者)	3.8	4.0	3.9	3.9	3.7	
2年(79期) 理系	3.7	4.0	4.0	4.0	3.8	
	1年次	3.5	3.7	3.7	3.8	3.7
3年(78期) 理系	4.0	4.1	4.1	4.1	4.1	
	2年次	3.9	4.0	4.0	4.0	4.0
	1年次	3.9	3.9	3.9	3.9	3.9

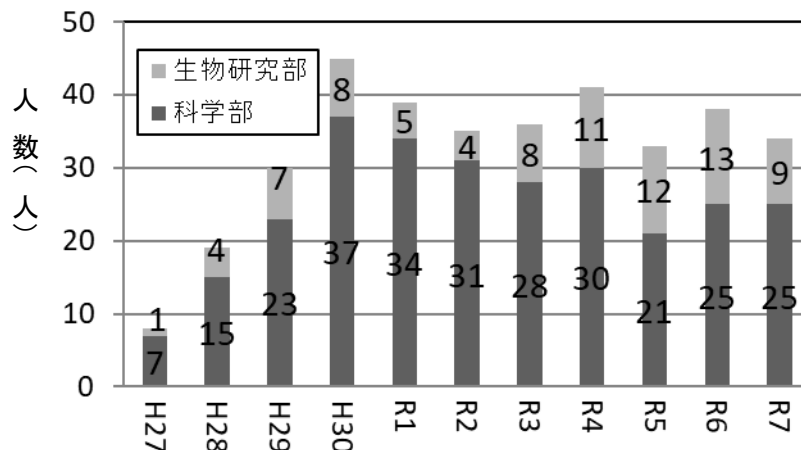
	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)
1年(80期)	3.8	3.7	4.0	3.9	3.5	3.4
2年(79期)	3.8	3.8	3.9	3.9	3.7	3.2
	1年次 3.6	3.6	3.9	3.7	3.5	3.2
3年(78期)	4.0	3.9	4.1	4.1	3.9	3.7
	2年次 4.0	3.9	4.1	4.0	3.8	3.3
	1年次 3.8	3.8	4.1	3.9	3.5	3.4
1年(80期) 文系 (志望者)	3.7	3.7	3.9	3.8	3.6	3.5
2年(79期) 文系	3.8	3.8	3.9	3.9	3.8	3.3
	1年次 3.6	3.6	3.7	3.7	3.5	3.2
3年(78期) 文系	3.9	3.9	4.0	4.0	3.9	3.8
	2年次 3.8	3.8	4.1	4.0	3.7	3.3
	1年次 3.8	3.7	3.9	3.9	3.6	3.6
1年(80期) 理系 (志望者)	3.8	3.8	4.0	4.0	3.5	3.4
2年(79期) 理系	3.8	3.8	4.0	3.8	3.7	3.1
	1年次 3.6	3.6	4.0	3.8	3.4	3.1
3年(78期) 理系	4.1	4.0	4.2	4.2	3.9	3.5
	2年次 4.1	4.0	4.2	4.1	3.9	3.3
	1年次 3.9	3.8	4.2	4.0	3.5	3.2

○SSH事業に関するアンケート 教員集計結果

対象者は、非常勤講師を除く本校教員 75 名である。表中の数値は、選択肢 1～4 の合計人数に対する選択肢 1 + 2 の人数の割合（肯定的な回答）、および選択肢 1 の人数の割合である。

教員アンケート結果		「1+2」の割合	「1」の割合
(1)本校の教育活動全般にとって有意義である	1 とてもそう思う	96%	69%
	2 ややそう思う		
	3 あまり思わない		
	4 全く思わない		
(2)生徒の進路意識を高める	1 とてもそう思う	96%	58%
	2 ややそう思う		
	3 あまり思わない		
	4 全く思わない		
(3)将来を担う人材の育成に効果がある	1 とてもそう思う	94%	60%
	2 ややそう思う		
	3 あまり思わない		
	4 全く思わない		
(4)生徒の国際性・英語運用能力の向上に役立つ	1 とてもそう思う	92%	52%
	2 ややそう思う		
	3 あまり思わない		
	4 全く思わない		
(5)教員の指導力向上に役立つ	1 とてもそう思う	87%	37%
	2 ややそう思う		
	3 あまり思わない		
	4 全く思わない		
(6)課題研究は生徒にとって有意義である	1 とてもそう思う	87%	47%
	2 ややそう思う		
	3 あまり思わない		
	4 全く思わない		
(7)課題研究の指導は教員としての資質向上に役立つ	1 とてもそう思う	79%	34%
	2 ややそう思う		
	3 あまり思わない		
	4 全く思わない		

○科学系部活動の活動状況



○コンテスト等の参加状況

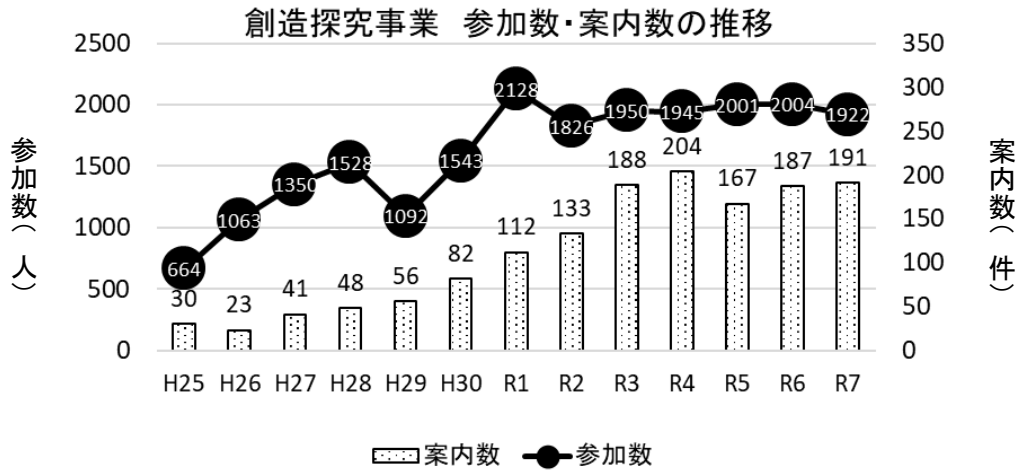
()数字は件数

令和7年度	
応募・参加	<ul style="list-style-type: none"> ・京都・大阪マスマインターセクション (1) ・マイクロマウス関西地区大会 (2) ・SSH生徒研究発表会 (1) ・宇宙甲子園缶サット部門(1) ・大阪府学生科学賞 (2) ・科学の甲子園大阪府大会 (1) ・高校化学グランドコンテスト (1) ・大阪府生徒研究発表会 (8) ・Technovation Girls 2025(1) ・グローバルサイエンティストアワード”夢の翼”(1) ・生物オリンピック(5) ・物理オリンピック(3) ・数学オリンピック(8) ・情報オリンピック(2) ・ハイスクールラジエーションクラス(1) ・第3回 ドローンプログラミングチャレンジ全国大会 in 白浜(1) ・ロボカップジュニア 和歌山ノード大会(1) ・GLHS合同発表会 (1)
	<ul style="list-style-type: none"> ・大阪府学生科学賞 : 優秀作品・大阪府教育委員会賞(1)、佳作(1) ・マイクロマウス関西地区大会 : 特別賞(2) ・Technovation Girls 2025文部科学大臣賞 ・グローバルサイエンティストアワード”夢の翼” : 奨励賞(1)
受賞したもの	

○英語運用能力について

	令和7年度
3年卒業時に CEFR B1 レベル相当以上を取得している生徒数	223人

○創造探究事業について



○本校が独自に開発した教材・授業資料

科目	教材	概要	掲載URL
LC I	探究ノート	SDGsから「問い」を見つけ、達成するためのアイデアを「答え」として提案し、「根拠」を示して説明し、その過程を論文としてまとめるための本校独自教材。書き込む作業と調べてまとめる作業が1冊ででき、一定の書式に沿った論文を作るスキルが身につくようになっている。	https://kozu-osaka.jp/ssh/%e6%8e%a2%e7%a9%b6%e6%b4%bb%e5%8b%95%e3%82%92%e9%80%b2%e3%82%81%e3%82%8b%e5%ad%a6%e6%a0%a1%e3%81%b8/%e8%aa%b2%e9%a1%8c%e7%a0%94%e7%a9%b6%ef%bc%88%e2%85%bcc1%ef%bc%89
	ワークシート 授業スライド 授業進行表 評価ルーブリック	LC I の授業で使用するワークシートと授業スライド、授業進行表、および評価に使用するルーブリック。課題研究の入門編として、担当者の教科・科目に関わらず、誰でもどこの学校でも使用できることをめざして、授業パッケージとして作成している。	
LC II	課題研究ノート	研究テーマの立案から調査・実験方法、結果、考察、思考の整理まで、全てを記録するための本校独自教材。	https://kozu-osaka.jp/ssh/%e6%8e%a2%e7%a9%b6%e6%b4%bb%e5%8b%95%e3%82%92%e9%80%b2%e3%82%81%e3%82%8b%e5%ad%a6%e6%a0%a1%e3%81%b8/%e8%aa%b2%e9%a1%8c%e7%a0%94%e7%a9%b6%ef%bc%88%e2%85%bcc2%ef%bc%89
	ワークシート 資料プリント 評価ルーブリック	LC II の授業で使用するワークシートと資料プリント、および評価に使用するルーブリック。課題研究は各教科・科目で取り組むが使用する教材をそろえることで、統一した指導が可能となっている。	
LC III	論文作成用様式 資料プリント 評価ルーブリック	LC III の授業で作成する論文の様式と指導に使用する資料プリント、および評価に使用するルーブリック。	https://kozu-osaka.jp/ssh/%e6%8e%a2%e7%a9%b6%e6%b4%bb%e5%8b%95%e3%82%92%e9%80%b2%e3%82%81%e3%82%8b%e5%ad%a6%e6%a0%a1%e3%81%b8/%e8%aa%b2%e9%a1%8c%e7%a0%94%e7%a9%b6%ef%bc%88%e2%85%bcc3%ef%bc%89
LC情報	授業プリント 授業スライド 課題ファイル	プログラミングやデータサイエンスなど研究に必要なICTスキルを学ぶため、大阪工業大学と連携し、授業プリントや授業スライド、課題ファイルを独自に作成している。	https://kozu-osaka.jp/ssh/%e6%8e%a2%e7%a9%b6%e6%b4%bb%e5%8b%95%e3%82%92%e9%80%b2%e3%82%81%b8/lc%e6%83%85%e5%a0%b1

○用語集

G L H S : 「Global Leaders High School」の略。これからの社会のリーダーとして活躍する人材を育成することを目的に平成23年から始まった大阪府の学校指定制度。

G U L S : ガルズと呼ぶ。「Global Understanding with Local Skills」の略。本校が大阪国際交流センターと共同で立ち上げた外国語会話と文化を学ぶ事業。

I M U : アイムユーと呼ぶ。「International Meetups」の略。英語運用能力の向上をめざし、フィリピンのアンジェリカム大学付属高校と年間6回程度行うオンライン交流。

K I T E C : カイテックと呼ぶ。「Kozu Intensive Training of English Communication」の略。英語運用能力向上をめざした少人数でのネイティブスピーカーによる英語運用集中講座。

L C : 「Liberty & Creativity」の略。「自由と創造」は本校創立以来の校風校是である。

サイエンティフィックスキルズ : 本校が定めた科学的素養のこと。研究倫理、議論技術、プレゼンテーション技術、レポート作成技術、検索・調査技術、論文・要旨作成技術などをさす。